569-14
1200501516531
9
14

岩波文庫

1565

紅い花

他四篇

作 ガルシン
譯 西神清

岩波書店

569
14

251

帝國圖書館藏

岩波文庫
1565

紅いい花

他四篇

ガルシン作
神西清譯

岩波書店

昭和十二年十二月寄贈

569
14

目次

紅い花……五
四日間……三七
信號……六五
夢がたり……八七
アッタレーア・プリンケプス……九九
あとがき……一一九

紅い花

イヴァン・セルゲーヴィチ・トゥルゲーネフの記念に

一

「畏くも天の下しろしめす皇帝、ピョートル一世陛下の御名代として、余は本癲狂院の査閲を宣す！」

甲高い、耳がびんびんするやうな大音聲で、そんな文句が述べ立てられた。インクの汚點だらけの机に向かつて、ぼろぼろの大きな帳簿にその患者の名を書き込んでゐた病院の書記は、思はず微笑を浮かべてしまつた。だが患者を護送して來た二人の若者は、にこりともしなかつた。二晝夜といふものまんじりともせずに、この狂人と面と向かひ合つて汽車に搖られた擧句に、ここまで連れて來たのだから、立つてゐるのもやつとなのである。降りる一つ手前の驛で狂氣の發作がひどくなつたので、何處やらで狭窄衣を手に入れて、車掌や憲兵に手傳つて貰つて患者に着せたのだつた。そのまま彼をこの町まで運び、いまこの病院に送りとどけたところである。

「見るも怖ろしい姿だつた。發作の時ずたずたに裂いてしまつた鼠色の服のうへから、刳り込みの大きいごはごはのズックの狭窄衣が、ぴつちりと胴體を緊めつけてゐる。長い袖が、兩腕をぎゆつと胸の上に十文字に組ませ、背中でくくり上げてある。眞赤に充血した兩眼は大きく見ひら

かれ（これで十日のあひだ一睡もしないのだ）、じつと動かぬ熾火のやうに燃えてゐる。神經性の痙攣が下唇の端をぴくぴくと引つ攣らせ、くしやくしやになつた縮れ髪が、まるで鬣のやうに額に垂れかかつてゐる。さうして事務室の隅から隅へづしづしと足早に歩き廻つて、探るやうな眼つきで書類のはいつた古戸棚や油布張りの椅子をじろじろ眺めたり、時には護送人の方をちらりと見たりする。

「病棟の方へ御案内して。右の方です。」

「僕は知つてゐる、知つてゐるよ。去年も君たちと一緒に來たことがあるからな。僕らはこの病院を檢閲したんだよ。僕は何もかもすつかり知つてるんだから、さう易々とは騙されんぞ。」

患者はさう言ふと、扉口の方へくるりと向き直つた。看視人がその前の扉をあけてやると、相變らずづしづしと足早に、しかも決然たる足どりで、狂つた頭を高々と反らしながら事務室を出て行つたが、右へ折れると今度は殆んど駈足で、精神病患者の病棟の入口までやつて來た。護送人たちもやつと追ひついて行つたほどだつた。

「ベルを押して呉れ。僕には押せん。君たちに兩手を縛り上げられちまつたからな。」

番人が扉をあけると、一行はそのまま病棟へ歩み入つた。

それは昔の役所風の建て方をした、大きな石造の建物であつた。大廣間が二つあつて、一つは

食堂に、もう一つは穏やかな患者の共同病房になつてゐる。廣い廊下が走つてゐて、庭の花壇へ下りる玻璃扉がついてゐる。それから患者の入れてある單獨病房が二十ばかり――ざつとかうした間どりが一階を占めてゐる。一階にはまだそのほかに暗い部屋が二つあつて、一つは毛蒲團をいちめんに張り廻し、もう一つは板張りだが、いづれも兇暴性の患者を收容するのである。それから圓天井のついた巨きな陰氣な部屋――これは浴室である。二階は婦人患者が占領してゐる。そこからは調子の外れた噪音が、唸り聲や苦痛の叫びで引き裂かれながら、階下まで傳はつて來るのだつた。この病院の定員はもともと八十名なのだけれど、近隣の數縣をここ一つで掛け持ちしてゐるので、患者の收容數は三百人にも及んでゐた。手狹まな病室ごとに寢臺が四つか五つは入れてある。冬は患者を庭へは出さないし、鐵格子の外の窓はみんなぴつたりと閉ざしてしまふので、病院の中はたまらない息苦しさであつた。

新來の患者は浴槽のある部屋へ連れて行かれた。健康な人間にさへ、この部屋の空氣は重苦しい印象を與へまいものでもないのに、ましてや常軌を逸し興奮しきつた想像力の持主には、尙更その作用はひどかつた。それは圓天井のついた大きな部屋で、石を疊んだ床はべとべとしてゐて、明りは片隅にあるたつた一つの窓からしか射し込まない。壁と圓天井とは赤黑い塗料で塗り上げられ、垢と埃で黑ずんでゐる床には、まるで二つの楕圓形の穴に水を張りでもしたやうに、石の

浴槽が二つ、床面とすれすれに嵌め込んである。途方もなく大きな銅製の爐が、湯沸かし用の圓筒形の鑵や、そのほか銅管だの活栓だのの一切の裝置を具へて、窓と反對側の一隅を占めてゐた。さうしたものが皆んな、病的な頭腦にとつては異常に陰慘で幻想的な性質を帶びてゐるところへ、湯番をしてゐる肥つたウクライナ人がまた、つひぞ口を利いた例しのないむつつり屋と來てゐるので、その陰氣な顏つきが彌がうへにも部屋の印象を暗くするのであつた。

この怖ろしい部屋に連れて來たのは、患者を入浴させて、この病院の醫長の療法にしたがつて頸筋に發泡膏を塗布するためであつたが、部屋の樣子を一目みると、彼は恐怖と忿怒に取つ憑かれてしまつた。途方もない想念が、次第に怪奇の度を增しながら、あとからあとからと頭の中で渦を卷いた。一體これは何だらう？　むごたらしい邪宗改めの法廷か？　仇敵どもが彼を亡きものにしようと思ひ定めた祕密の刑場か？　ひよつとしたらこれが地獄ぢやあるまいか。しまひには、これは何かの拷問なのだといふ想念が浮かんだ。必死になつて抵抗する彼を、寄つてたかつて裸かにした。ところが病氣のせゐで二人力になつてゐた患者は、幾人かの看視人の手を苦もなく振りほどいてしまひ、相手は勢ひ餘つて床べたへつんのめつてしまつた。やつと四人がかりで押し倒して、手とり足とり溫湯の中へつつ込んだ。それが患者にはくらくらに煮え返つた熱湯と思はれ、その狂つた腦裡を、煮え湯や灼熱した鐵棒を使ふ拷問についての脈絡のないきれぎれの

考へが、稻妻のやうに閃めき過ぎた。湯にむせ返つて、看視人たちにしつかり抑へつけられた手足を痙攣的にもがきながら、喘ぎ喘ぎ、何やら取留めのないことを喚き立てるのだつた。それは、自分の耳で實際に聞いた人でない限り、想像もつかぬやうな叫喚であつた。祈りの文句もあつたし、呪詛の叫びもあつた。精根つきるまで喚きつづけてゐたが、やがてしまひには熱い涙をぽろぽろ零しながら、それまで喚き立ててゐた言葉とは何の脈絡もない文句を、小さな聲で唱へるのだつた。「聖なる大殉教者ゲオルギイ。この肉體はあなたの御手にお任せします。だが魂は――いいや、厭です、厭です。」

看視人たちはまだ抑へてゐる手をゆるめなかつたけれど、患者はそのうちにすつかり鎭まつてゐた。溫浴と頭に當てがつた氷囊が、利き目をあらはしたのだつた。ところが殆んど氣を失つてゐる彼を湯の中から引き上げて、發泡膏を塗布するため腰掛に掛けさせる段になつて、殘つてゐた力と狂つた想念とが、またしても文字どほり堰を切つて迸つた。

「何故そんな、何故そんなことをする」と彼は喚いた、「俺は誰にも惡いことをした覺えはないぞ。何の罪でこの俺を殺すんだ。おおお、おお、主よ！　おお、我れに先んじて十字架を負ひ給へる主よ。お願ひです、お救ひ下さい。……」

頸筋へ來た燒けつくやうな感じが、彼を必死にもがき狂はせた。看視人たちは手の附けやうが

ないので、途方に暮れてしまつた。

「仕方がない」と施術にかかつてゐた看護卒が言つた、「摩擦せにやならん。」

この何でもない言葉に、患者は慄へ上がつてしまつた。『摩擦だと……何をこする、誰をこする？　この俺をだ！』と彼は考へ、死なんばかりの怖ろしさに兩眼をつぶつた。看護卒はごはごはのタオルの兩端を握ると、力いつぱいに壓しつけながら、勢ひよくごしごしと頸筋をこすつた。發泡膏が剝げ落ち、頸の上皮がすりきれて、赤剝けの擦り傷があとに殘つた。平靜な健康人にとつてさへ我慢のならぬこの施術の苦痛は、病人にはこの世の終りかと思はれた。必死の力を滿身にこめてぐいと一と踏張り、看視人たちの手を振りもぎつた途端に、赤裸かのからだは石疊のうへにころころと轉がつた。彼は首を斬り落とされたかと思つた。喚かうとしたが聲が出ない。彼は失神したまま病床に運ばれ、そのまま死んだやうな深い長い睡りに落ちた。

二

彼が氣がついたのは眞夜中であつた。あたりはしんとしてゐる。隣りの大きな部屋からは患者たちの寢息が聞こえて來る。どこか遠方で、その一夜を眞暗な部屋に押し込まれた患者が、單調な奇妙な聲で自分を相手に喋つてゐる。かと思ふと二階の婦人病棟からは、嗄れた女聲中音（コントラルト）が何やら野卑な歌を唄つてゐるのが聞こえてくる。病人は耳を澄ましてこれらの聲に聽き入つてゐた。手足から腰から、そこらぢゆうが怖ろしく懈（だる）く、ぐつたりと力の拔けた感じだつた。頸筋がづきづき痛んだ。

『俺は何處にゐるんだらう、どうしたんだらう？』といふ考へが浮かんだ。と遽かに彼の腦裡には、この一と月の自分の生活が不思議なほどありありと描き出されて、自分が病氣なこと、それも何處が悪いかといふことまでが、はつきり悟られたのだつた。さまざまな途方もない想念や言葉や行爲が思ひ出され、それが總身を慄へあがらせた。『だがもう濟んだのだ。ああ有難い、もう濟んでしまつた！』と呟くと、彼はまた睡りに落ちた。

鐵格子の嵌まつた窓は開け放してあつて、大きな建物と石の塀に挾まれた細い露路に面してゐた。この袋小路にははいつて來る人もないので、名も知らぬ野生の灌木の叢（むら）や、ちやうどその季節に美しい花をつける紫丁香花（むらさきはしどん）やが、一面にはびこり繁つてゐる。……繁みの向ふには、窓と丁度むかひ合はせに、石の塀が黑々とそそり立つてゐた。宏大な庭園の樹立（こだち）が、高い梢に月光を浴び、また月かげを透かせながら、石塀ごしに覗いてゐた。右手には病院の白い建物がそびえ、鐵格子の嵌まつた窓々が、あかるく内側から照らされてゐる。左手は――月の光に眩しいほど白く

浮きあがつた、死亡室の盲ら壁である。月光は窓の鐵格子をとほして室内の床に落ちて、寢臺の一部と、眼をつぶつた病人の疲れきつた蒼い顔とを照らしてゐた。いま見ると狂氣じみたところは少しもなかつた。それは疲れ果てた人に來る、夢も見ず身じろきもせず、息さへも殆んど通はぬ深い睡りであつた。ほんの數瞬のあひだ、彼はまるで健康な人のやうに、完全な知覺をもつて眼ざめたのである。やがて朝になれば、またもとの狂人として寢床を起き出ようがため。

三

「御氣分はいかがです?」と翌る日、醫者が彼にたづねた。

たつたいま眼をさましたばかりの病人は、まだ毛布にくるまつてゐた。

「頗るよろしい」と跳ね起きてスリッパを穿き、寢間着をぎゆつと摑みながら彼は答へた、「實によろしい。だがたつた一つ、そらここが——」

と自分の頸を指さして、

「痛くつて頸が廻せないんです。まあそんな事はどうでもいい。あれが分かりさへすりや文句はないのさ。ところが僕は分かつてゐるんだ。」

「いま何處にをられるのか御存知ですか。」

「そりや勿論、ドクトル。僕は癲狂院にゐるのです。だがあれが分かつてしまへば、そんなことは全くどうでもいいんです。全くどうだつていいことですよ。」

醫者は患者の眼にじつと見入つてゐた。見事に手入れの行き屆いてゐる金色の髯、金緣眼鏡ごしにじつと見てゐる落ち着き拂つた青い眼——醫者の美しい、嗜みのいい顏はぴくりともせず、見透し難いものがあつた。彼は觀察してゐたのである。

「何故さう僕を見詰めるのです? 僕の心の中なんかとても讀めるもんですか」と患者は言葉をついだ、「しかし僕にはあなたの心の中が讀める。何故あなたは惡いことをするのです? 何故あなたは不幸な人達をこんなに集めて、ここに監禁して置くのです? 僕のことはどうでも宜しい、僕は一切を見拔いて泰然としてゐるんだから。しかしあの連中はどうです? ああした苛責が一體何になるのです。自分の魂には偉大なる思想、萬有に相通ずる思想が存するといふことを達觀した人間にとつては、何處に住まうと何を感じようと同じことです。生死すらも問ふところではありません。……さうぢやないですか?」

「さうかも知れませんねえ」と醫者は答へて、患者の姿がよく見えるやうに、部屋の一隅の椅子に腰をおろした。患者は大きな馬革のスリッパをぺたぺたいはせ、荒い赤縞に大きな花模樣の

ついた木綿の寢間着の裾をはためかせながら、勢ひよく隅から隅へ歩き廻つてゐる。

醫者のお供をして來た助手と監督とは、不動の姿勢で扉口に立ちつづけてゐる。

「で、僕にはその思想がある！」と患者は叫んだ、「それを發見したとき、僕は生まれ變つたやうな氣がしました。感覺は鋭敏になり、頭腦は今までにないほどよく働く。これまでは推理や臆測の長い道程を經て到達したことを、今では直覺的に認識する。哲學が作り上げたものを、僕は現實的に把握したのです。空間と時間とは擬設（フイクション）である——といふ大いなる觀念を、僕は身を以て體驗しつつある。僕はあらゆる世紀に生きてゐる。僕は空間を絶した所に生きてゐる。到る處に生きてゐるとも言へ、また何處にもゐないとも言へませう。だからあなたが僕をここに監禁して置かれようと、或ひは解放なさらうと、僕が自由の身であらうと束縛されてゐようと、僕にとつては同じことなんです。ここには僕同樣の人々がまだ數人ゐることを僕は認めました。しかしその他の有象無象にとつては、かういふ狀態は怖ろしいものです。何故あなたは解放してやらないのですか。一たい誰に必要が……」

「今あなたは」と醫者は遮つた、「時間と空間を絶したところに生きてゐると言はれましたね。しかし、あなたと私が現にこの部屋に居り、そして今が」と時計を出して、「一八＊＊年五月六日の十時半であるといふことは、否定する譯には行きません。この點はどうお考へですか。」

「別にどうとも考へてゐません。何處にゐようと何時（いつ）に生きようと、僕には同じことなのです。僕にとつて同じことである以上、つまり『僕』といふものが、隨處にあり隨時にあるといふことになるではありませんか。」

醫者はちらつと薄笑ひを漏らした。

「珍らしい論理ですねえ」と彼は立ち上がりながら言つた、「或ひはあなたの言はれる通りかも知れません。ではまた。葉卷をひとついかがです？」

「有難う。」——彼は立ちどまつて葉卷を取ると、神經質にその端を嚙み切つた。「これは思考の助けになる」と彼は言つた、「これは世界だ、小宇宙だ。一方の端にはアルカリがあり、他の端には酸がある。……互ひに對立する原理が中和してゐる世界の平衡狀態も、やはりこの樣なものだ。……さやうなら、ドクトル！」

醫者は囘診をつづけた。患者の大部分はそれぞれの病床の傍に直立して、彼を待ち受けてゐた。どんな役所の長官でも、精神病醫がその患者から受けるほどの敬意を、部下から受けることはないのである。

さて例の患者はひとりになると、病室の隅から隅へ、せかせかと落着きのない歩みをつづけた。お茶が運ばれて來ると、彼は立つたままで、把手（たつて）のついた大コップを二た口で空にし、ほとんど

瞬くひまに白パンの大きな塊まりを平らげてしまつた。それから病室を出て、數時間といふもの小休みもなしに、例のづしづし云ふ足早な歩調で、建物の端から端へと歩きつづけた。その日は雨模様だつたので、患者たちは庭へ出されなかつた。助手が新來の患者を捜しに來て見ると、他の患者が廊下の外れを指さして見せた。彼はそこに佇んで、庭へ出る玻璃扉のガラスにぴつたりと顔をつけたまま、じいつと花壇に見入つてゐた。罌粟の一種の、異樣に鮮やかな眞紅の花が、彼の注意を惹きつけたのである。

「體重を量りますからいらして下さい」と、彼の肩に觸れながら助手は言つた。

そして患者がくるりと顔を振り向けたとき、助手はぞつとして、殆んどたじたじとなつた。それほどに兇暴な敵意と憎惡の色が、狂つた眼の中に燃えてゐたのである。しかしそれが助手だと分かると、彼は直ぐさま顏色を改めて、まるで深い物思ひに沈んでゐるかのやうに一言も口を利かずに、おとなしく後からついて來た。醫者の診察室にはいると、患者は言はれぬ先に自分から、十進法の目盛りのついた小型な秤の臺座に立つた。助手は體重を取ると、帳簿の彼の名のところに一〇九露封度と記入した。翌日には一〇七になり、三日目には一〇六になつた。

「この調子で行つたら、あの患者はとてももつまい」と醫者は言つて、出來るだけいい食餌を與へるやうに言ひ附けた。

だがそれにも拘はらず、また患者の異常な食慾にも拘はらず、彼は日に日に痩せ衰へて、助手が日毎に記入する露封度の數はだんだん少くなつて行くのだつた。患者は殆んど睡眠をとらず、來る日も來る日も終日小休みもなしに動き廻つてゐた。

四

彼は癲狂院にゐることを意識してゐた。自分が病氣だといふことさへ意識してゐた。時々はあの最初の晩のやうに、終日の狂ほしい運動の後に來た靜寂のさなかで、四肢のつきづきする鈍痛と、頭の怖ろしい重さとを感じながら、それでも完全に意識を取り戻して眼ざめることがあつた。恐らく深夜の靜寂のなかでは外界の印象が闕けてゐること、また恐らくは眼をさましたばかりの人間の腦髓の働きの鈍さが、さうした瞬間彼に自分の狀態をはつきりと認めさせ、あたかも健全であるかのやうな相を呈させるのであらう。しかし夜が明けると、射し入る光とともに、また病院の生活の眼ざめとともに、またしても樣々の印象が大波をなして彼を取り圍むのだつた。病んでゐる腦髓はそれらの印象をもて扱ひ兼ねて、彼はまたもや狂人になつてしまふのだ。彼の狀態は、正しい判斷と妄想との奇妙な混合物だつた。彼には、自分の周りにゐる者が皆んな病人だと

(ネルヴァルのオーレリアに引用される)

いふことは分かつてゐたが、それと同時に彼等の一人一人に、自分が曾て知つてゐた、或ひは本で讀んだことのある、乃至は噂に聞いたことのある誰かれの顏を——それら漸く密やかに薄れ隱れようとしてゐる、または全く忘却の狹霧に蔽はれてしまつてゐる面影を、見出すのであつた。

で病院には、あらゆる時代、あらゆる國々の人が住んでゐた。生きてゐる人も死んでゐる人もあつた。その名一世に鳴り響いた人々も、武勇の譽れ天下に高い人々も、また此の間の戰爭で死んで、ふたたび甦つて來た兵士もゐた。彼は、地上の一切の力を集中させた或る妖しい魔法の輪の中にゐる自分を見、思ひ傲つた恍惚のなかで、自分をその輪の中心だと思つた。彼の病院仲間はみんな、ある仕事を遂行するため此處に集合したのであり、その仕事は彼の胸には漠然と、地上の惡の絕滅を期する雄大な一大事業なのだと思ひ描かれた。具體的に果たしてどういふ事をする事業なのかは、彼にも分からなかつたが、彼はそれを遂行するに充分な力が身内にあることを感じてゐた。彼は他人の心の中を讀むことができた。事物にその全歷史を見ることもできた。病院の庭の楡の大樹は、その過去の一切の傳說を彼に物語るのだつた。病院の建物は事實かなり昔に建てられたものではあつたが、彼はそれをピョートル大帝の造營であると考へ、帝がポルタヴァの役の當時に住まはれたものと確く信じてゐた。それを彼は四方の壁や、剝げ落ちた漆喰や、庭に轉がつてゐる煉瓦や陶瓦の破片の上に讀んだのだ。家屋と庭園の一切の歷史は、それらのもの

の上に記されてゐた。彼は死亡室の小さな建物に、とうの昔に死んでゐる何十人何百人の人間を住まはせ、その地下室から庭の片隅に面して明いてゐる小窓に、じつと眼を凝らすのだつた。すると、その虹色をした汚れた古硝子のうへの光の亂反射の中に、曾て生あるものとして、または肖像畫として彼の眼に觸れた、見覺えのある面影が浮かぶのであつた。

そのうちに澄み渡つた晴天の日々が來た。患者たちは終日庭に出て外氣のなかで過ごした。その庭の彼等の領域は廣くはなかつたが、樹々がよく生ひ繁つて、植ゑられる限りの場所には一面に草花が植わつてゐた。監督は少しでも勞働のできる者にはみな庭で働くやうに强ひてゐたので、彼等は日ねもす小徑を掃いて砂を撒いたり、自分たちの手で犂き起こした花壇や、胡瓜や西瓜や甜瓜の苗床の草むしりをしたり、水をやつたりしてゐた。庭の隅にはよく繁つた櫻の林があつた。それに沿つて楡の並木が連らなつてゐた。中央の小さな築山の上には、庭ぢゆうで一ばん美しい花壇が作つてあつた。鮮やかな色の花々が上段を緣どつて生え、その眞中には、豐滿な、珍らしいほど大輪の、赤い斑點のある黃ダリヤが、今を盛りと咲き誇つてゐた。このダリヤは一段と小だかいところに位して、庭全體の中心をなしてゐたので、多くの患者がこの花に何かしら神祕な意味を附してゐることは、一見してそれと見てとられた。新來の患者にもやはり、その花は尋常一樣のものとは言ひ切れぬ或るもの、何かしら庭園と家屋の守護女神像のやうに思はれるのだつ

た。あらゆる小徑の兩側にも、患者達の手で花が植ゑてあつた。そこには小露西亞地方の庭々で見られるありとある花があつた。丈なす薔薇、色鮮やかな衝羽根朝顔、小さな淡紅色の花をつけた見上げるやうな莨の叢立ち、薄荷、孔雀草、凌霄葉蓮、それから罌粟。またその庭には、昇降口のぢき傍に、何か特別の種類と見える罌粟が三株はえてゐた。普通の罌粟よりもずつと花が小さく、その眞紅の色の並々ならぬ鮮やかさが、普通には見られぬ特徴であつた。入院後の第一日に、例の患者が玻璃扉ごしに庭を眺めてゐたとき、その眼を驚かしたのはこの花なのであつた。

はじめて庭に出た彼は、昇降口の段を下りようともせずに、何よりも先づこの燃えるやうな花を眺めた。花はたつた二つしかなかつた。それは他の草花から離れて、偶然この雜草の拔いてない場所に生えたので、よく茂つた藜や、名も知らぬ丈の高い南方の雜草が、ぎつしりと周りを取り圍んでゐた。

患者達は順ぐりに扉から外へ出た。扉口には看視人が一人立つてゐて、額に赤十字の印のついた木綿編みの厚手の白い患者帽を、めいめいに手渡すのだつた。この帽子は戰地に行つて來たもので、競賣で買ひ入れたのである。とはいへ、例の患者がこの赤十字の印に、特別な神祕な意味を附してゐたことは言ふまでもない。彼は帽子を脫いで十字の印を眺め、それから罌粟の花を眺めた。花の方が鮮やかだつた。

「奴の方が勝つてゐる」と患者は言つた、「だがまあ見てゐろよ。」

そして彼は昇降口を離れた。あたりを見廻し、背後に立つてゐる看視人の姿には氣づかずに、彼は花壇を一跨ぎしてその花の方へ手を伸ばしたが、摘みとる勇氣は出なかつた。まるで得知れぬ力の何かしら强烈な流れが、その眞紅の花瓣から發して、彼の全身を貫きとほしでもしたやうに、彼はまづ差し伸べた手に、やがては全身に、燒けつくやうな感じと、刺すやうな痛みを感じたのである。彼はぐいとにじり寄つて、花とすれすれまで手を伸ばしたが、花は人命を奪ふやうな毒氣を發散して、防いでゐるやうに彼には思はれた。彼は眩暈がして來た。彼が最後の死にものぐるひの努力をして、やつとのことで莖に手をかけた時、にはかにどつしりと重い手が彼の肩にかかつた。看視人が彼を捉へたのだ。

「毟つてはならん」とウクライナ人の老人が言つた、「花壇へはいつてもならん。ここには君等のやうな氣ちがひが一杯ゐる。それに一本づつ毟られたら、庭ぢゆうが坊主になつてしまふからね」と彼は、患者の肩をつかまへたまま、諭すやうな口調で言つた。

病人は彼の顏を眺め、無言のままその手を振りほどくと、興奮して小徑を歩いて行つた。『あ、哀れな奴等だ』と彼は思つた、『お前等は眼が見えないのだ。彼奴をかばふほどに、お前等は盲ひ果ててゐるのだ。だが俺は、どんなことがあらうと、きつと彼奴をやつつけて見せる。今日

が駄目なら明日こそ力競べをしてやらう。それで俺が死んだとしても、どつちみち同じことぢやないか。……』

彼は日がとつぷりと暮れるまで庭をぶらついて、患者仲間と交際を結んだり、または對談者がみなてんでに、途方もない摩訶不思議な言葉で自分の狂つた考へを言ひ表はして、それに對する相手の返答だけを聞くといつた風な、奇妙な會話を交はしたりした。病人はいまこの患者と歩いてゐたかと思ふと、すぐまた別の患者と道連れになつて、日が暮れる頃には、彼が自分に言ひ聽かせた文句によると『用意はすつかり出來てゐる』ことについて、ますます確信を深めるに至つた。間もなく、間もなく鐵の格子は崩れ落ち、これら監禁されてゐる人々は殘らずここを出て、地上のありとある涯へと飛んで行く。そして全世界は戰き震へ、着古した衣をかなぐり棄てて、新らしい驚くべき美しさを以て立ち現はれる。……彼は花のことは殆んど忘れてしまつてゐたが、庭を去つて昇降口を上がらうとしたとき、黒ずみかけて既に露を宿しはじめてゐた雜草の茂みの中に、まるで二つの紅い炭火のやうな罌粟の花が、あらためてまた彼の眼についた。すると病人は患者の群から後れて、看視人の背後に佇み、まんまと惠まれた瞬間をつかんだのだつた。誰ひとり、彼が花壇を飛び越え、花を鷲摑みにして、いそいで胸の肌衣の下に匿したのを見たものはなかつた。冷え冷えと露を含んだ草の莢が彼の肉體に觸れたとき、彼は死人のやうに蒼ざめて、

恐怖のあまり眼を大きく見開いた。冷汗が彼の額に滲み出た。

病院にはランプがともつた。晩食を待つあひだ、患者の大部分は寢床に横になつてゐたが、幾人かの躁狂性の患者はせかせかと廊下や廣間を歩いてゐた。花を抱いた患者もその一人だつた。十文字に組んだ兩腕を、ぐいぐいと痙攣的に胸に壓しつけながら、彼は歩いてゐた。胸に匿した草花を壓し潰してしまひたい、みじんに揉みしだいてしまひたいと思つてゐるやうだつた。ほかの患者が向ふから來ると、彼は着物の緣の觸れ合ふのを懼れて、遠廻りに避けて通つた。『傍へ寄らんで呉れ、傍へ寄らんで呉れ！』と彼は叫んでゐた。しかし病院の中では、そんな大音聲に一々注意を向ける人はまづ無かつた。で彼はいよいよ足早に、ますます大股になりながら、何かしら激しい怒氣を含んで、一時間二時間と歩き廻つてゐた。

「へとへとにして呉れるぞ。息の根をとめて呉れるぞ！」と彼は、空ろな聲でさも憎さげに言ふのだつた。

ときどき彼は齒ぎしりをしてゐた。

食堂に晩食が出た。卓子掛のない大きな食卓の列の上には、金の蒔繪のある色塗りの木鉢がそれぞれ幾つかづつ置かれて、その中に水つぽい黍粥が盛つてあつた。患者達は長い腰掛に坐つた。黒パンが一片づつ配られた。八人ほどが一組になつて、おもやひの鉢から木匙で食べるのだつた。

上等食を支給される幾人かの患者には、別室で食事が出た。看視人によつて自分の病室へ呼び込まれた例の患者は、その看視人が運んで來た一食分を急いで一呑みにしてしまふと、それでは満足がゆかずに共同食堂へやつて來た。

「僕もここに坐らせて下さい」と彼は監督に言つた。

「もうお濟みぢやなかつたのですか」と、お代りの粥を木鉢に注ぎながら監督はきき返した。

「僕はとても空腹なんです。それに僕はうんと精分をつける必要がある。僕の命を繋いでゐるのは食物だけなんです。御存知の通り、僕は一睡も出來ないのですから。」

「ぢやまあ、たんとお食りなさい。タラス、この方に匙とパンをお上げ。」

彼は木鉢の一つに向かつて坐ると、更にびつくりするほど大量の粥を平らげた。

「さあ、もう澤山、もう澤山」と、一同が食事を了へたとき監督はさう言つたが、病人はまだ腰を上げずに鉢の上へのしかかつて、片手では粥を掬ひ、のこる片手では胸をしつかり抑へてゐた。「お腹を毀しますよ。」

「ああ、僕にどれほどの力が、どれほどの力が要るのか、あなたが分かつて下すつたらなあ！ ではお別かれします、ニコライ・ニコラーエヴィチ」と彼は食卓を立ちながら、監督の手をぎゆつと握りしめて言つた、「御機嫌よう。」

「一たい何處へいらつしやるのです？」と監督は微笑しながら訊いた。

「僕ですか？ 別に何處へも。此處にをりますよ。だが明日は恐らくお目にかかれますまい。色々と御親切に有難うございました。」

さう言ひながら、もう一ぺん監督の手を固く握りしめた。彼の聲は顫へ、眼には涙が浮かび出た。

「まああなた、落ち着いて下さい」と監督は答へた、「何だつてそんな陰氣なことを考へるのですか。お部屋に歸つて横におなりなさい。そしてぐつすりお寐みなさい。あなたはもつと睡眠を攝らなくちやいけませんよ。よく眠りさへすれば、直きに快くなりますよ。」

病人は咽び泣いてゐた。監督は顔をそらすと、食事の殘りを早く片づけるやうに、看視人たちに命じた。それから半時間ののちにはもう、病院の中はすつかり寢靜まつてゐたが、ただ一人、角の部屋の寢臺の上に、着替へもせずに横たはつてゐる患者だけは例外だつた。彼は熱病患者のやうにがたがたと顫へ、前代未聞の怖るべき猛毒に犯されたと自ら考へてゐる胸を、痙攣的に緊めつけるのだつた。

五

彼は一晩ぢゆう眠らなかつた。彼があの花を摘み取つたのは、さうした行爲の裡に自分の遂行せねばならぬ大いなる業を見たからだつた。玻璃扉ごしにはじめて見かけた時、彼の注意はその眞紅の花瓣に惹きつけられてしまつた。そして彼には、この刹那を境にして自分が、この地上で自ら爲遂げなければならぬ事の何かを、完全に悟つたやうな氣がしてゐた。あの燃えるやうな紅い花に、世界のありとある惡が聚まつてゐたのだ。彼は罌粟からは阿片の採れることを知つてゐた。恐らくはこの想念が枝葉をひろげ、異樣な形をとつて、凄まじい怪奇な幻影を彼に作り上げさせたのであらう。彼の眼にはその花は、ありとある惡の凝つて成つたものと映じた。その花は、罪なくして流された人類の血を一滴もあまさず吸ひとり（だからこそあんなに眞紅なのである）、人類のあらゆる涙、あらゆる膽汁をも吸ひとつたのだ。それは神祕な怖るべき存在であり、神の反對者であり、さも內氣さうな無邪氣さうな風を裝ふ暗黑神であつた。毫り取つて、殺してしまはねばならないのだ。しかもそれだけではまだ足りない。それが息を引きとる際に、身內の凡ての惡を世界へ吐きだすやうなことがあつてはならないのだ。だからこそ彼は、それを自分の懷にじつと押し匿してゐたのである。彼は、夜が明ければその花が、一切の魔力を失ふことと期待してゐた。その惡は彼の胸に、魂に乘り移つて、そこで彼に征服されるか彼を征服するか、どつちかなのである。それが彼を征服することになれば、彼自身は滅びる、死ぬ。しかし彼は名譽ある戰士として死ぬのだ。のみならず、未だ曾て誰一人として、世界のありとある惡を相手に一擧に鬪ひを決しようとした者がない以上、彼は人類最初の戰士として死ぬのである。

「奴等にはあれが見えなかつた。俺にはちやんと見えたのだ。どうしてあれが生かして置けよう。そのくらゐなら死んだ方がましだ。」

そして彼は、ぐつたりとなつて横たはつてゐた。幻想の生んだ、現實にはない鬪ひではあつたが、それでも矢張りぐつたりと疲れ果てて。——朝になると、助手は息もたえだえの彼を見出した。がそれにも拘はらず、暫くすると興奮の力の方がうち克つて、彼は寢床から跳び起き、相變らず病院ぢゆうを駈けずり廻つて、今までにないほどの高聲と脈絡の無さとで、患者達と話をしたり獨り言をいつたりした。彼は庭へは出されなかつた。醫師は、體重が日ましに減つて行くのに、彼が相變らず一睡もせずに絕えず歩き廻つてゐるのを見て、多量のモルヒネの皮下注射を命じた。彼は抗らはなかつた。幸ひにもこの時は、彼の狂つた想念がこの施術にぴつたりと一致したのである。彼は間もなくうとうとと寢入つた。魔に憑かれたやうな運動は歇んだ。またあのせかせかした歩みの拍節から生みだされて、たえず彼につき纏つて離れなかつた轟くやうな樂旨も、

彼の耳から消え失せた。彼は自分を忘れ、一切の思考をやめて、摘み取らなければならない第二の花のことすら考へなくなつた。

しかしそれから三日すると、あつと思ふ暇もない咄嗟のうちに、老看視人の眼の前で彼はその花を摘みとつた。看視人は追つかけて來た。勝ち誇つたやうな悲鳴をあげながら、患者は病院へ駈け入つて、自分の部屋へとび込むが早いか、草花を胸に匿した。

「なぜ花を毟つたりする」と、後ろから駈け込んで來た看視人がつめ寄つた。が、その時はもう病人は腕組みをしたいつもの恰好で寢床に横たはつて、例の譫ごとを始めたので、急いで逃げる拍子に返し忘れた赤い十字の帽子を、默つて彼の頭から取つただけで、看視人は部屋を出て行つた。そして幻想の闘ひがまた始まつた。病人はその花から、蛇に似た何本もの長いうねうねした流れをなして、惡がのたくり出るのを感じるのだつた。それは彼に卷きつき、四肢を緊めつけ搾りあげ、その怖ろしい分泌物を彼の全身に滲み込ませるのだつた。彼は涙をぽろぽろ零しながら、敵に投げつける呪詛の文句の合間合間に神に祈つた。夕暮になると花は凋んだ。病人は黒ずんで來た草花を踏みにじつて、殘骸を床から拾ひあげると、それを浴室へ持つて行つた。形も何もなくなつた青草の小さな塊まりを、石炭で眞赤に灼けてゐる爐の中へ投げ込むと、敵がじゆじゆつと云つて縮くれあがり、やがての果てにはふんはりした、雪のやうに白い一片の灰に化して

しまふまで、彼は長いこと見守つてゐた。ふうつと吹くと、何もなくなつた。

翌る日、病人の容態は目に見えて惡化した。げつそりと憔けた頰、眼窩の奥へ落ち窪んでぎらぎらしてゐる眼、そして怖ろしいほど眞蒼な顏をした彼は、最早ふらふらと頼りない足どりで躓き躓き、憑かれたやうな歩みを續けながら、ひつきりなしに喋り立ててゐた。

「暴力には懇へたくないものだが」と科長がその助手に言つた。

「しかし先生、あの猛烈な運動だけは止めさせなければなりますまい。今日の體重は九三露封度でした。この調子で行くと、二日たてば死んでしまひます。」

科長は考へ込んだ。——「モルヒネか？　クロラールか？」と半ば問ふやうに言ふ。

「昨日はもうモルヒネも利きませんでした。」

「縛れと言つて吳れ給へ。だが僕は、まづ助かるまいと思ふよ。」

六

そこで病人は縛りあげられた。狹窄衣を着せられ、幅のひろいズックの帶で寢臺の鐵枠へしつかり結へ附けられて、彼は自分の寢床に横たはつてゐた。しかし運動性の狂躁は鎭まるどころか、

却つて募る一方だつた。枷から自由にならうとして、彼は何時間もぶつ通しの執拗な努力を試みた。到頭しまひに、力一ぱいにぐいと突つ張ると、帶が一本きれて足が自由になつた。やがてもう一本の帶からも拔け出して、手を縛られたまま部屋のながを歩き廻つて、兇暴な譯のわからぬ言葉を喚きはじめた。

「ひやあ、このやつがれ！……」と、はいつて來た看視人が喚きたてた、「何たる惡魔か助けをつたぞな？　グリツコやい、イヴァンやい！　いそぎ來うよう、拔け出をつたがな。」

彼等は三人がかりで病人に飛びかかつて、そこで長い格鬪がはじまつた。それは攻擊する側にとつても厄介千萬なものだつたが、ましてや消耗した力の殘りを振り絞つて防禦する方にとつては、やり切れない苦難であつた。とどのつまり彼は寢臺のうへに押し倒されて、前よりも固く縛り上げられてしまつた。

「君たちは自分でしてゐる事が分からんのだ」と病人は喘ぎ喘ぎ叫んだ、「君たちは滅亡に瀕してるんだぞ。僕は咲きかけてゐる三つ目の奴を見たんだ。今頃はもう彼奴め、用意ができた頃なんだ。賴む、この仕事を果たさせて呉れ。彼奴を殺さにや、殺さにや、殺さにやならん。さうしたらすつかり片附くんだ、みんなが救はれるんだ。君たちに賴んでもいいが、これが出來るのはこの僕だけなのだ。君たちはちよつと觸つただけでも死んでしまふ。」

「默つとりなされ、若旦那や、默つとりなされ」と、見張りのために寢臺の傍に居のこつた老看視人がいつた。

病人は急に默り込んでしまつた。看視人達を騙さうと決めたのである。一日ぢゆう縛られたまんまだつたが、なほそのうへに、その一晩は同じ狀態で置かれることになつた。病人に晩食を與へると、看視人は寢臺の下に何やら敷いて横になつた。一分後には彼はぐつすり寢入つてしまつたが、病人の方は仕事に取りかかつた。

寢臺の縱の鐵枠に觸れるやうに、彼は全身をねぢまげた。そして狹窄衣の長い袖の下に隱れてゐる手頸がそれに觸ると、勢ひよくごしごしと袖を鐵に擦りつけはじめた。暫くすると厚いズック地がすりきれて、食指がやつと自由になつた。さうなるともう仕事は手つとりばやく運んだ。健康な人にはとても信じられぬほどの巧妙さと、屈伸の自在さとで、彼は背中で括りあげてある袖の結び目を解きはなち、狹窄衣を振りほどいてしまふと、長いことじつと看視人の鼾に耳を澄ましてゐた。が老人は正體もない。病人は狹窄衣をぬいで、寢臺を拔けだした。彼はもう自由の身だつた。彼は扉に試つてみた。內側から錠がおりてゐる。鍵は恐らく看視人のポケットにあるのだらう。老人に目をさまされては困るので、そのポケットを探ることは諦めて、窓から脫け出ようと決心した。

靜かな暖かい闇の夜であつた。窓はあけ放してあつて、星かげが黑々とした空にまたたいてゐた。彼はそれを眺め、自分の知つてゐる星座を見わけたり、何となく星たちが自分の氣持を理解し、同感して呉れるやうな風に見えるのを喜ぶのだつた。彼は眼を瞬かせながら、星たちが自分へ送つてよこす無限の光を眺めてゐた。それにつれて狂つた覺悟はますます强まつて行くのだつた。鐵格子の太い棒をねぢまげ、せまい隙間を這ひぬけ、灌木の生ひ茂つた露路へ下りたつて、それから高い石塀を乘り越えなければならぬ。そこでいよいよ最後の鬪ひだ。そのあとでは——死んでもいい。

彼は素手で太い鐵棒を曲げようとして見たが、鐵はびくりともしなかつた。そこで彼は狹窄衣の丈夫な袖を繩に撚り、鐵棒の尖の槍になつてゐるところへ引つかけて、全身の重みでそれにぶら下がつた。殘つてゐる力の殆んどありつたけを振り絞つた死にもの狂ひの努力の後で、槍先はやつと折れまがつて、狹い口があいた。肩や肘や、裸かの膝頭をすり剝きながら、彼は無理やりにその隙を拔けだし、灌木の叢を搔きわけて、石壁の前に立ちどまつた。あたりは靜まり返つてゐた。終夜燈の明りが、巨きな建物の窓々を內側から鈍く照らして、その中には人影も見えなかつた。誰も彼に氣づいたものはないのだ。彼の寢臺の傍で番をしてゐた老人は、恐らくぐつすり眠つてゐるのだらう。星たちの優しく瞬く光が、彼の心臟にまで沁み透つてきた。

「もうすぐにお傍へ參ります」と、彼は空を仰いでささやいた。

最初の試みでずり落ちて、爪を剝がし、手や膝頭を血だらけにした彼は、都合のいい場所を搜しはじめた。石塀が死亡室の壁と接してゐる處に、塀からも壁からも幾つかの煉瓦が崩れ落ちてゐた。病人はその窰ぽこを探り當てると、それを利用して石塀に這ひ登り、向ふ側に生えてゐる楡の枝につかまつて、幹をつたはつて靜かに地上に降りた。

彼は昇降口のそばの例の場所めがけて、轉ぶやうに走つて行つた。罌粟は花瓣を閉ぢて、露のおりた草の上にくつきりと浮き出しながら、小さな頭を黑ずませてゐた。

「最後の奴だ」と病人はささやいた、「最後の奴だ。今日こそは勝つか死ぬかだ。だがもう俺にはどつちだつて同じことだ。暫くお待ちください」と彼は空を仰いで言つた、「もうすぐにお傍へ參ります。」

彼は草花を根ごと引き拔くと、ずたずたにちぎつて揉み潰し、それを握りしめたまま、もとの途を自分の部屋へ取つて返した。老人は眠つてゐた。病人は寢床のところまで辿りついたかと思ふと、そのまま氣を失つて寢床の上に倒れてしまつた。

朝になつて、人々は死んでゐる彼を見出した。安らかな明るい顏をしてゐた。薄い唇と、深く落ち窪んだ閉ざされた眼——その表へ果てた相貌は、何かしら誇りかな幸福の色を浮かべてゐた。

彼を擔架に移したとき、人々は手を開かせて、紅い花を拔きとらうとした。がその手はもう硬直しだしてゐて、彼は自分の戰利品を墓へと持ち去つたのである。

四日間

俺たちは森のなかを走つてゐた、彈丸がシユツシユツと鳴つてゐた、そいつに拂はれて小枝がばらばら降つて來た、俺たちは山櫨子の繁みを押しわけ搔きわけ突き進んだ――みんな憶えてゐる。射擊はますます激しくなつた。森の外れを透かしてみると、そこここに何やら赤いものがちらつきだした。シードロフといふ、第一中隊のまだほんの子供の兵隊が(『何だつて彼奴こつちの戰線へ紛れ込みやがつたんだ?』と、そんな考へがちらつとしたつけがね)、いきなり地面へべたりと兩膝つくと、怯えあがつた大きな眼をして、振り向きざま默つて俺の顏を見やがつた。見るとその口から、血がたらたらつと流れてゐた。いや、あれだけは忘れられんな。それからこれも憶えてゐるが、殆んど森の外れのところで、藪の繁みをひよいと見ると、その中にゐたんだ……敵がさ。そいつ三抱へもありさうな、肥つた土耳古兵だつた。こつちは瘦せつぽちの弱蟲だが、まつ向から躍りかかつて行つた途端に、何やらばあんと音がして、その時の感じぢや何かかう途轍もないでつかいものが、俺の傍をすつ飛んでつた。耳ががあんとしちまつたつけ。『こいつ擊つたな』と俺は思つた。ところが向ふは、わつと一こゑ悲鳴をあげると、山櫨子のやけに繁つた一叢へ背中を押つつけてもがいてゐる。その叢だちを廻つて逃げればいいものを、怖さのあまり

無我夢中で、棘々の枝のなかへめり込んぢまつたのさ。ただ一打ちでそいつの銃を叩き落として、つづく一突きで何處とも知れず、ぐさりと銃劍をぶつ通した。唸るでもなし呻くでもなし、變てこな聲がしたつけ。それからまた俺は駈けだした。味方は『ウラー！』の喊聲をあげて、ばたばたと倒れる、ばらばらつと擊つ放す。忘れもしない、俺も五六發ぶつ放したつけが、それはもう森から野原へ出るところだつた。と、いきなり『ウラー』の聲が一際ぐんと高まつて、俺たちは一齊に前進した。いや俺たちぢやない、前進したのは味方の兵で、俺はちやんと元の場所にゐるんだ。をかしいなと思つた。それよりまだ變だつたのは、ぐるりの物が一時にすつと消えちまつた。鬨の聲も銃聲も、ぱつたり熄んでしまつたんだ。しいんと靜まり返つたその中で、ただ何やら青いものが眼にうつつた。てつきりあれは蒼穹だつたんだらう。やがてそれも消えちまつた。

後にも先にも、あんな變てこな目に逢つたことはなかつたな。どうやら俺は腹這ひになつてるらしく、眼を遮るものといつたら、ただこれんぼつちの地面なんだ。小草が四五本、その一本を傳はつて逆落しに這ひおりる蟻が一匹、去年の草の名殘りなんだらう、芥の切れつ端が二つ三つ——まあそれだけが俺の全世界さ。そいつを俺は、片眼だけで見てるんだ。もう一方の眼はとい

ふと、何やら堅いものにぎゆつと壓しつけられてゐる。そいつは多分、俺の頭がのしかかつてる木の枝だつたんだらう。酷くぎごちない姿勢だから、動かうとするけれど、それが出來ない。なぜ出來ないんだか皆目わからん。そのままで時が經つ。蟋蟀がころころ鳴いてゐる、蜜蜂がぶんぶん唸つてゐる。そのほかには何の物音もない。そのうちに、自分のからだの下敷になつた右腕を、やつとこさで引き拔くと、兩手を地面へ突つ張つて、膝頭で起きあがらうとした。

何やら稻妻みたいなものが、あつと思ふ間もなく膝から胸へ、胸から頭へ、きりきりつと全身を貫きとほして、俺はまたぶつ倒れた。またしても眞の闇、またしても空々寂々さ。

俺はふつと眼がさめた。これはどうしたことだ、あのブルガリヤの青黑い夜空にぎらぎらしてゐる星影が、俺にはちやんと見えるんだ。するとここは天幕の中ぢやなかつたのかな？　何だつて俺は、這ひ出しなんぞしたんだらう？　俺は身動きをしてみる。すると兩脚が、捩がれるやうに痛いんだ。

さうか、俺は戰鬪で負傷したんだな。重傷か、それとも輕傷かなと、脚の痛むところを觸つて見た。右脚も左脚も、ごはごはに乾いた血糊でべつとりだ。手を觸れると、痛みは一さうひどく

なる。齲歯が痛むみたいな工合で、絶え間なしにづきんづきんと心にこたへる。耳鳴りがする、頭が重い。兩脚とも傷られたことは、まあ朧ろげながら分かつたが、一體これはどうした譯だ？　なぜ俺を收容しては呉れなかつたんだ？　さては味方は土耳古の兵に敗れたのかな？　そこでわが身に起こつたことを、俺は思ひ出しにかかつた。はじめは何だかもやもやしてゐたが、やがて判然して來たところに依ると、どうして敗北なんてことがありよう筈はないと結論が出る。だつて俺が倒れたのは（尤もこの倒れたことは憶えがない。ただ皆んながわつと前進したこと、だのに俺だけは駈けだせず、眼先にはただ何やら、青いものが消えずに殘つた、とまでは憶えてゐるんだが）――とにかく俺が倒れたのは、小丘を登つた草地だつたんだ。この草地を刀で指し指し、あの小兵の大隊長が、『おい皆んな、あすこを占るんだ！』と、例のよく徹る聲で叱咤してゐたつけ。そして俺たちはそこを占領したんだから、味方の敗北なんてありつこがない……。それをなぜ俺は收容されなかつたんだ？　何しろこの草原と來たら、からりと開けた場所なんだから、何一つ見えないものはない筈だ。それに此處でかうして轉がつてるのは、何も俺一人ぢやあるまいしさ。敵の射撃はあの通り猛烈だつたんだからな。ひとつ頭をねぢ向けて、あたりの樣子を見てやらう。今の寢方はそれをやるには都合がいい。最前ふつと氣がついて、例の小草や、それを傳つて逆落しに這ひおりる蟻を見たとき、俺は起き上がらうとして倒れた拍子に、もとの姿勢ぢやなしに仰向けに轉がつたんだからな。だからこそ、あの星影も見えるといふ譯だ。

俺は腰をもたげて坐らうとする。ところが何せ兩脚の傷だ、容易なことぢやなかつた。二三度もう駄目だとがつかりもしたが、やがての果てに、痛さに覺えず知らず涙を一ぱい溜めながら、どうやら坐ることが出來た。

頭上を仰げば、青黑い空の一角だ。そこに大きな星が一つと、小さな星が三つ四つぎらぎらして、まはりは何やら黑々とした、見上げるやうな物影だ。つまり灌木林なんだ。俺は藪のなかにゐたんだ、そこで置き去りか！

俺は髮の毛の根が、ぞおつとよだつ思ひがした。

それにしても、現に俺はあの丘の草原で敵彈を受けた筈なのに、何だつて藪の中なんぞにゐるんだらう？　てつきり擊たれた拍子に、傷の痛さに無我夢中で、ここへ這ひずり込んだものと見える。ただ合點の行かぬのは、今ぢや身動きもできぬこの俺が、その時どうしてこの藪まで辿りつけたかといふ點だ。ひよつとすると、その時の手傷は一箇所だつたが、ここへ這ひずり込んでからもう一發、とどめの彈丸を喰らつたのかな。

色あせた薄赤い斑點が、俺のまはりに這ひ寄つて來た。大きな星の光はうすれて、幾つか出てゐた小さな星も、いつの間にやら消えちまつた。月の出だ。これが家だつたら、さぞよからうに

なあ！……

何やら妙な音がして來る。……誰やら人が呻いてゐるやうだ。さうだ、たしかにあれは呻き聲だ。誰か兩脚をやられた奴か、それともどてつ腹へ彈丸を喰つた奴が、御同樣に置き去りにされて、どつかそこらに寢てるんぢやあるまいか。いいや違ふ、呻き聲はすぐ耳の傍でしてゐるんだが、見渡すところあたりに人影はないらしい。……いやはやこりやあ、何のこつたい——この俺なんだ！　かすかな、哀れつぽい呻き聲だつた。本當にそんなにも俺は痛いのかなあ？　いや痛みもしようさ。ただ頭ん中が朦つとして、まるで鉛みたいに重いもんだから、その痛さが分からんだけの話だ。またゴロリとして、一睡りした方が氣が利いてるぞ。眠るんだ、眠るんだ……。

だが、そのまま醒めず仕舞ひになるんぢやないかな？　なあに構はん。

横にならうとすると、蒼白い月の光が太い帶をなして、さつと俺の臥所を照らす。すると何やら大きな物かげが黑々と、五六歩むかふに寢てゐるのが見えた。其奴のところどころが、月光を浴びてぎらついてゐる。ボタンか武器の類ひだらう。して見れば屍體か負傷兵かに違ひない。

どつちだつていい、俺は寢るんだ……。

いやいや、そんな筈があるもんか。味方は遠くへ行つちやゐない。ここにゐるんだ。土耳古の奴等を追つ拂つて、この位置にとどまつた筈なんだ。それが話聲ひとつ聞こえず、焚火のはじけ

る音もしないのは、一體どうした譯だらう？　つまりその、俺が衰弱し切つてゐるので、耳が利かなくなつたんだ。味方はきつと此處にゐるんだ。

「助けてくれ！……助けてくれえ！」

人間離れのした、狂ほしい、嗄れた悲鳴が、胸の底から迸り出たが、答へはない。自分の聲が破鐘のやうに、夜氣をふるはして擴がつて行く。ほかには何の物音もない。ただ蟋蟀が相も變らず、しきりにころころ鳴くだけだ。月はまん圓な顏をして、悲しさうに俺を見てゐる。

もしそこの其奴が負傷兵なら、これほどの大聲だ、氣がつかんといふ法はない。して見ると屍體だ。味方かな、土耳古つぽかな？　ああ、やれやれ！　どつちだつて同じぢやないか？……と思ふうちに睡魔が、俺の腫れぼつたい眼にのしかかつて來た。

俺はもう最前から目が覺めてはゐるんだが、眼を瞑つたままじつと寢てゐる。つぶつた瞼ごしに日の光が感じられるので、俺は眼をあけたくないんだ。眼をあいたら最後、そいつが沁みるに違ひないからな。それにまた、下手にもぞもぞせん方がいい……。昨日（たしかあれは昨日だつたな？）俺は傷られたんだ。あれからかれこれ一晝夜だが、もう一晝夜もすれば俺は死ぬ。どう

せ死ぬものなら、じたばたしない方がいい。身體なりとじつとして置いてやらう。ついでに腦味噌の働きまで停められるんなら、願つたり叶つたりだが！　だが此奴ばかりはどうにもならん。いろんな想念、いろんな追憶、そいつが頭の中にひしめき合つてゐる。だがそれも長いことぢやあるまい、ぢきに終りだ。ただ新聞に數行をとどめるだけの話だ。我軍の損害輕微、負傷何名、戰死志願兵イヴァーノフ、とな。いや名前も出まい。戰死一名と出るのが落ちだらう。兵一名か、あの野良犬と同じだな。

一幅の情景がまざまざと俺の想ひに燒きついて來た。それはよつぽど前のことだ。尤もさういへば過去の一切、俺の全生涯、つまり兩脚ぶち拔かれて此處にかうして寢るまでの生活は、一切合切とほい昔の夢に思へるんだが……。或る日街を歩いてゐると、人だかりで足を停められた。みんなが佇んで、默然と眺めてゐたのは、何かかう血まみれの白つぽいもので、そいつが哀れげな啼き聲を立ててゐる。見れば豆みたいな可愛らしい小犬だ。鐵道馬車に轢かれて、今の俺みたいに死にかけてるんだ。するとそこへ、何處かの門番が割つてはいつて、小犬の頸根つこを撮みあげると、そのまま向ふへ持つてつちまつた。そこで人垣も散つたつけ。

この俺を撮みあげて呉れる人があるかしら？　いやいや、此處でこのまま死ぬ運命なんだ。それにしても人生はいいものだなあ！……あの日は（つまり小犬が遭難した日だが）、俺にとつちや

幸福な日だつた。俺は何やら浮かれ心地で、ふらりふらりと歩いてゐたが、それにはちやんと譯があつた。思ひ出せば切ないばかりだ、ええ思ふまい！　むかしの幸福、いまの苦艱……現在の苦しみだけで澤山だ。覺えず知らず今の身に引きくらべて、ひとしほ切なさが增すばかりの、昔の思ひ出なんぞに用はない。ああ辛い、やるせない！　こいつは傷よかよつぽど毒だ。

ところで暑くなつて來た。日がかんかんに照りつける。俺は眼をあける。見えるのは、おんなじ藪におなじ空、ただそれを晝の光で見るだけの違ひだ。ほう、隣りの先生もゐるな。いやこりやあ土耳古兵だ、死んでゐる。何ててつかい奴だらうなあ！　そこで氣がついてみると、やつぱり彼奴だつた……。

俺の手にかかつた男が、眼の前に轉がつてるんだ。一たい何の恨みがあつて、俺はこの男を殺したんだらう？

奴は血まみれの屍體になつて此處に寢てゐる。何だつて奴は運命の手に、此處へなんぞ追つ立てられて來たんだらう？　一體どこの何者だらう？　恐らく奴にも、俺と同じに年寄りの母親があるんだらう。その母親が、夕暮れ時になるごとに、いぶせい泥小屋の戸口へ出ては、遠い北の空を眺めながら、いつまでもじつと坐つてゐるだらう――いとしい息子はまだ歸らぬか、一家の支へ、老い先の賴みはまだ歸らぬか？……

ところで俺は？　俺だつて同じことだ。……ああいつそ、この男と代れるものなら代りたい。何て果報な奴だらう、耳も聞こえず、傷の痛みも感じるぢやなし、死なんばかりの心の悶えも、咽喉の渇きも知らずにゐるのだ。……銃劍がぐさりと心臓へとほつたんだな。……見ろ、軍服に大きな穴が黒々とあいてゐる、その周りは血だらけだ。それをやつたのは――この俺だ。

別にさうするつもりはなかつた。戰地へ向ふ時だつて、誰に恨みがあるでもなかつた。俺も人殺しをするんだなんてことは、どうしたわけか綺麗に忘れてゐた。どんな工合にこの胸板を矢玉に曝して呉れようかと、ただそればかりを心に描いた。そして愈〻さらしに出たんだ。

それがまあ何てこつた？　ええ、吾ながら愛想がつきる！　ところでこの不運な埃及（エジプト）の百姓になると（奴は埃及軍の服だつた）――まだまだぐつと罪は輕い。樽詰め鯡みたいに船に積まれて、コンスタンチノープルへ運ばれるまでは、ロシヤのこともブルガリヤのことも、噂に聞いたことさへないんだ。行けと言はれたから來たまでだ。厭だなんて言はうもんなら、笞を喰らふは固よりのこと、まかり間違へば何とか總督（パシヤ）にピストルの彈丸（たま）をぶち込まれたかも知れんのだ。奴はそこでスタンブール*からルシチューク**まで、遙々辛い行軍をした擧句、我軍の攻撃に逢つて、防戰したといふわけだ。ところがこつちが荒武者で、奴のかかへてゐる英國製の特許（パテント）つきピボディ"マルチニ式の旋條（ライフル）銃なんぞは物ともせずに、ぐんぐん前へ出て行くもんだから、奴さん怯えあがつてしまつたんだ。そこで逃げださうとした途端に、これが平生ならあの眞黒な拳固の一撃でひとたまりもなく往生しさうな何處かの小男が、ひよいと跳び出して來て、ぐさりと心臓めがけて銃劍を突つ立てた。

これで奴に何の罪がある？

またこの俺にしたつて、なるほど殺しはしたけれど、一たい何の罪があるんだ？　ええ、何の罪咎があるんだ？　それを何の報いでかうも咽喉が渇くんだ？　咽喉が渇く！　この言葉の意味を、知つてゐる人があるなら手を擧げろ！　ルーマニヤを通るときは、あの四十度といふ怖ろしい炎天を、日に五十露里の强行軍をやつたつけが、その時だつてこれほどの渇きは知らなかつた。ああ、誰か來て呉れないかなあ！

ああ、さうだ！　彼奴のあのでつかい水筒の中には、きつと水があるだらう！　だがあすこまで行かなきやならんな。さぞ痛むこつたらうな！　なあに構はん、やつつけろ。

俺は這ひだす。脚をずるずる引きずりながら、力の拔けた兩手で、梃子でも動かぬ胴體をやつとこさで押して行く。屍體まではほんの二間あまりだが、それが俺にとつちや何十露里にもまし

---

* スタンブール＝コンスタンチノープルの土耳古名。

** ルシチューク＝ブルガリヤの都市、ローム河とドナウ河の交流點にある。

て遠い——いや遠いぢやない、辛いんだ。だがとにかく這つて行かにやならん。咽喉が燒けつく、まるで火みたいにかつかと燃える。それに水なんかない方が、手つ取り早く死ねるんだが、そこがそれ、若しやといふことが……。

で俺は這つて行く。脚が地面にひつかかつて、ひと動きするごとに涙が出るほど痛い。俺は大聲を立てる、情ない聲だ、だがやつぱり這つて行く。やつと辿りつく。そら水筒だ……たしかに水はある——それもどつさりある！　半分以上もあるらしい。有難い！　まづ當分は水に困らん……やがて死ぬその時までは！

現在手にかけたこの俺を、お前は助けて呉れるのだ！……俺は片肱ついて水筒の紐をときにかかつたが、ふと中心を失つて、命の恩人の胸の上へ、がくりと顔をついてしまつた。相手はもうひどい屍臭を發してゐた。

俺はたらふく飲んだ。生溫い水ぢやあつたが腐つてはゐず、それに澤山あつたから。これでまだ二三日は生き延びられる。さうさう、あの『日常生理』といふ本に、水さへあれば人間は、食物がなくとも一週間以上は生きてゐられるものだと、さう書いてあつたつけな。さう言へばあの

本には、絶食自殺を遂げた男の話も出てゐたつけ。そいつはなかなか死ねなかつた、水を飲んでたからだ。

で、それがどうした？　よしんばあと五六日生き延びたところで、それが一たい何になる？　味方はゐないし、住民どもは逃げちまつた。この近邊には往來もない。どつちみち死ぬんぢやないか。三日で濟むこの苦しみを、わざわざ一週間に引き延ばしただけの話だ。いつそ一思ひにやつた方がよくはあるまいか？　隣りの先生の傍には銃もある、しかも素晴らしい英國製だ。ただ片手を伸ばしさへすりや、あとは——ほんの一瞬きで片がつく。彈藥も一山そこに轉がつてゐる。射ちきる暇がなかつたんだ。

やつつけるか——それとも待つか？　待つつて何をだ？　救助をか、死をか？　土耳古の奴等がやつて來て、この深傷（ふかで）を負つた脚の皮を、剝がしにかかるまで待つといふのか？　それくらゐなら自分でやつた方がましだ。

いやいや、さう力を落としたものでもないぞ。最後まで、力の盡きるまで、闘つて見ようぢやないか。何しろ見附けて呉れさへすれば、俺は助かるのだ。骨は無事だつたかも知れんのだ。元のからだにはなれるだらう。故郷（くに）へ歸つて、母にも逢へる、あのマーシャにも……。

ああどうかして、あの二人が本當のことを知らずに濟めばよい！　俺が即死を遂げたものと思

はして置きたい。俺が二日、三日、そして四日も苦しみ拔いたと知つたなら、あの二人の胸の中はどんなだらう！

眩暈がする。お隣りまでの大旅行で、精も根も盡きちまつた。おまけにこのひどい臭氣だ。此奴えらく土色になつて來やがつたなあ……これが明日明後日と重なつたら、一體どんなになるんだらう？　何しろかう力が拔けちまつては退くにも退けんから、ここにかうして寢てゐるんだ。ひと休みしたら、また元の場所へ這ひ戻らう。幸ひ向ふは風上だから、この厭な臭ひを拂つて吳れるだらう。

俺はぐつたりと横たはつてゐる。日がじりじりと顏や手に炒りつける。引つ被りたいにも何もない。せめて早く夜になつて吳れればいい。それで二た晩目になる勘定かな。

思ひが次第にもつれて來て、俺はうつらうつらと睡りに落ちる。

だいぶ長く眠つたと見え、目が覺めたときはもう夜中だつた。別に變つたこともない。傷はづきづきするし、隣りの先生は相變らず小牛みたいな圖體で、じつと動かず寢てゐるのだ。どうもこの男のことが氣になるなあ。一たい俺が、愛しいもの大事なものを皆んな振り棄てて、

遙々こんなところまで千露里もの遠征をやつて、飢ゑ、凍え、炎熱に惱んだのは、そしてとどのつまりは今ここにかうして、悶え苦しみながら寢てゐるのは——ただ一つ、この不運な男の息の根をとめんが爲めに過ぎなかつたのか？　一たい俺はこの殺人のほかに、何か戰さの利益になることを爲でかしたか知ら？

殺人、人ごろし……。それは誰のことだ？　この俺なんだ！

俺が從軍を思ひ立つたとき、お袋もマーシャも諫め立てはしなかつた。尤も俺の身を思つて泣いちや吳れたが、理想に目の眩んだこの俺は、そんな涙を見向きもしなかつた。あとで親身な者達にどんな憂目を見せることになるのやら、てんで分かつちやゐなかつたんだ（今こそ思ひ知つたんだが）。

ええ、今さら思ひ出して何になる？　過ぎたことは返りはせん。

だがあのとき俺の決心を聞いて、友達仲間の見せた態度は、實に奇怪至極だつたなあ！『ふん、馬鹿な奴め！　何が何やら分かりもせんで出しやばりやがる！』だとさ。そんなことが言へた義理かい？　やれ英雄的精神だ、やれ祖國愛だと、何のかんのと言ふ口の下から、よくもそんな文句が吐けたな？　あの連中の眼から見たつて、俺は卽ちさうした勇猛心の發揮者ではないか。だのにその俺のことを、『馬鹿な奴め』と拔かすんだ。

で俺はまづキシニョフ*へ行つた。そこで背嚢はじめ色んな裝備を背負はされた。それから何千といふ戰友と連れ立つて出掛けたんだが、その中には俺みたいに志願して出た奴が、さあ四五人もゐたらうか。他はみんなお許しさへ出りや家に轉がつてゐたい奴等だつた。がとにかく奴等も、俺たち『自覺ある』連中と行を俱にして、何千露里の道もいとはず、いざ戰ひとなれば俺たち同樣に奮戰するんだ、いや寧ろ俺たち以上かも知れん。許しさへ出りや早速なにもかも打棄つて、歸つて行きさうな手合ひだが、本分だけはよく盡くすんだ。

四　日　間

身にしむやうな朝風がさつと吹き渡つた。藪がざはめいて、寢ぼけた小鳥が一羽ばたばたと飛び立つた。星影も消えた。暗藍色の空は白みかけて、柔らかい羽毛のやうなちぎれ雲が一面に浮いて出た。灰色の薄闇がみるみる地上を離れてゆく。いよいよ三日目の幕あきか、俺の……さて何と言つたものかな、餘生でもなし、まあ斷末魔のさ。

三日目と……餘すところあと幾日かな？　いづれにせよ殘り僅かだ。俺はひどく衰弱しちまつて、どうやら屍體の傍を離れる力もなささうだ。間もなく俺も此奴と同じ屍體になつて、お互ひに敵も味方もなくなるだらう。

水はうんと飲まなきやならん。日に三度、朝、午、晩と飲むことにしよう。

四　日　間

日が昇つた。その巨大な盤面は、灌木林の黑い枝で縱横無盡に切り裂かれて、血のやうに眞紅だ。今日も暑さうだな。おい隣りの先生、お前はどんな姿になることかしらん？　今でさへ淺ましい姿なのになあ。

まつたく二目と見られぬ姿だつた。髮はそろそろ脫け落ちだして、もともとどす黑い膚の色は、蒼ざめかけて、黃味をさへ帶びてゐた。顏の浮腫に皮が引つ攣れて、耳の後ろが裂けてゐた。そこには蛆がわいてゐた。脚絆ばきの兩の脚にも浮腫が來てゐて、脚絆の留釦のあひだから、ぶよぶよの大きな水腫れがはみ出してゐた。全身もふくれあがつて小山のやうだ。このうへ今日の日照りに曝されたら、一體どんな態になるんだ？

かうぴつたりと寄り添つてゐたんぢや遣り切れない。何はともあれ這ひ戻ることだ。だが出來るかしらん？　まだ手も利くし、水筒の栓を拔いて、ぐびりぐびりと飲むことも出來るが、さてこの動きのとれぬ重たい胴體を、持ち運ぶとなるとどうだかなあ？　ともあれ動いて見よう。ほんの僅かづつでもいい、よしんば一時間に半歩でも。

---

* キシニョフ＝當時南露ベッサラビヤ縣の首都。

この引越しで午前中は丸つぶれだ。痛みはひどいが、この場に臨んでそれが何だ？　俺はもう健康人の感覺なんか覺えてもゐず、それがどんなものやら見當さへつかなくなつてゐる。どうやら脚の痛みにも慣れつこにさへなつてゐる。朝のうちに何と二間あまりを這ひ戻つて、また元の場所にほつと息をついた。ところが新鮮な空氣を――尤も腐れかかつた屍體から六歩のところで、新鮮なもないもんだがね――とにかくそいつを樂しめたのも束の間で、風が變つて、またしても厭な臭ひが吹きつける始末だ。いやその猛烈なこと、思はず胸がむかついたね。空つぽの胃袋がきりきりつと引つ攣るやうに收縮する。臟腑といふ臟腑がのたうち廻る。だのにむつと鼻をつく、蒸れた空氣は、遠慮會釋もなく漂つて來るんだ。

心の底から情なくなつて、俺は泣きだす。

全くもうへとへとで、心機は朦朧と、殆んど失神狀態でぶつ倒れてゐた。と遽かに……。もしや氣の迷ひから來る空耳では？　いいや、どうもさうとは思へない。おお確かにあれは――人聲だ。蹄の音だ、人聲だ。すんでのことで大聲立てようとして、辛くも思ひとどまつた。萬一あれが土耳古の奴等だつたらどうする？　その時はどうなる？　今の苦しみにかてて加へて、これど

ころか、新聞で讀んでさへ身の毛のよだつ、淺ましい憂目を見なければならぬ。生き皮を剝がれ、深傷の脚を火炙りにされるんだ……。それだけで濟めばまだしもだが、全く奴等と來たら何を考へ出すやら分かつたもんぢやない。ここでこのまま死ぬよりも、奴等の手にかかつて往生する方が增しだとでも言ふのかい？　だがひよつとして味方だつたら？　ええ、糞忌々しい藪だなあ！　何だつてさうぎつしりと垣根みたいに、ぐるり一面に生えやがつたんだ？　透かして見たくもこれぢや何一つ見えやせん。ただ一箇所まるで小窓みたいに、枝の隙間から遙かの窪地が見渡せるところがある。あすこにはたしか小川があつて、戰鬪の前に俺達が水を飲んだつけな。さう言やなるほど、あの小川に橋の代りに架してあつた、砂岩のでつかい板石も見えるぞ。奴等はきつとあれを渡るに違ひない。そのうちに人聲は遠のく。一たい何語で喋つてゐるのか、つひに聞き分けられなかつた。耳まで遠くなつてたんだ。南無三！　もしも味方であつて呉れたら……俺は聲張りあげて呶鳴つてやらう。あの小川の邊からだつて、聞こえぬといふ筈はあるまい。下手まごついて土耳古の民兵ばらの手に落ちるより、その方が上策だ。どうしたんだらう、なかなか通りかからんなあ。待ち遠しさに氣が氣でない。屍體の臭氣は薄らぐ段ぢやないのだが、それさへきれいに忘れてゐた。

と不意に小川の渡しに姿を見せたのはコサック騎兵だ！　青い軍服、ズボンの赤側條、槍の林

——堂々五十騎ほどの一隊だ。先頭には黒鬚の將校が、駿馬を打たせて進んで行く。つづく五十騎が渡河を終へると見るが早いか、將校は鞍上あざやかに、全身ぐるりと後ろへ捩ぢ向けて、

「速歩にい、進めえ！」と號令をかけた。

「待て、待つて呉れえ、後生だあ！　助けて呉れ、助けて呉れよお、おおい皆んな！」

俺は喚き立てるが、張り切つた馬の蹄の音、サーベルの響き、コサック特有の例のがやがや話に、俺の嗄れた叫びの勝てよう筈もなく——奴等の耳にははいらんのだ！

ええい駄目か！　心の張りが一時にゆるんで、俺はがくりと地面へ突つ伏すと、おいおい聲をあげて泣き出した。その拍子にひつくり返した水筒から、水が流れだす。いや水ぢやない、俺の生命が、助かる望みが、末期を延ばして呉れる靈泉が、どくどくとこぼれるんだ。ところがはつと氣づいた時には、もうコップにせいぜい半分ほどを餘すばかり、あとはからからに乾あがつて、咽喉を鳴らして待つてゐた大地へ、吸ひ込まれてしまつてゐた。

この哀れ無殘な目に逢つてからの俺の茫然自失の態を、今さら思ひ返すことが出來ようか？俺は薄眼をあけたまま、死んだやうに横たはつてゐた。風向はひつきりなしに變つて、新鮮な清らかな空氣を送つて來るかと思へば、また例の悪臭を吹きつける。この日のうちの隣りの先生の凄まじい變りやうと來たら、筆にも舌にも盡くされない。一度その樣子を見ようと眼をあけてみ

たが、思はずぞつとしちまつた。もう顔の影も形もありはしない。骨を離れて流れちまつたんだ。その露出しの顎骨がにたりと浮かべてゐる笑ひ、もはや消える時のない笑ひが、俺には反吐が出るほど厭だつた、淺ましかつた。髑髏をいぢくつたこともあるし、生けるが儘の人頭にメスを入れて試片を作つた覺えもある俺だが、あんな思ひをしたことは曾てなかつた。その骸骨が軍服をきて、ボタンを光らせてゐるのを見ると、俺はがたがた慄へちまつた。『これが戰爭だ』と俺は思つた、『これがその姿だ。』

日は相變らずじりじりと炒りつける。手といはず顔といはず、もう最前からひりひりしてゐる。水の殘りもすつかり飲んぢまつた。渴きがあんまり酷いので、ほんの一口飲むつもりのところを、思はずがぶりと飲み乾したのだ。ああ何だつてこの俺は、あのコサックの一隊がすぐ鼻先きを通つたとき、聲を立てて呼ばなかつたんだ！　よしんばそれが土耳古の奴等だつたにしろ、まだしも增しぢやなかつたか。なあに、たかだか一二時間の責苦で濟んだんだ。ところがこれぢや、何時まで此處にすつ轉がつて苦しむことやら、見當さへもつかんのだ。ああお母さん、懷かしいお母さん！　これがお耳にはいつたら、さぞや白髮の垂髮をかき毟つて、頭を壁へ打ちつけて、私を產みなすつた不吉な日をば呪はれるでせう、いやいや人の子を苦しめに戰爭なんぞを思ひついたこの世界を、さぞや呪はれることでせう！

だが、あんたにしろマーシャにしろ、私がこんなに苦しんだことなど、噂にも聞くはずはないんだ。さやうなら、お母さん、さやうなら、わが許嫁、戀しいマーシャ！　ああ辛い、情ない！　すると胸もとに何やらがこみ上げて……。

ええ、またあの白い小犬めが！　門番は不便がるどころか、脳天を壁へ叩きつけて、そのまま汚水の流れこむ塵芥溜めへ、抛り込んでしまつたつけ。だが小犬はまだ息があつて、それからまる一日苦しんだんだ。ところがこの俺はもつと慘めだ、何しろこれで三日も苦しみ拔いてるんだからな。明日は――四日目だ、それから五日目、六日目……。死神め、貴樣は何處にゐる？　來い、早く來てくれ！　早く俺を引つ攫つて呉れ！

四日間

だが死神は、來ても呉れず攫つても呉れない。そして俺は、この凄まじい日照りの下にすつ轉がつたなり、燒けつく咽喉をうるほさうにも一滴の水もありはせず、そろそろ屍體の臭ひが傳染つて來さうだ。奴はすつかり壞れてしまつた。その殘骸から、何萬と知れぬ蛆蟲が、ぽろりぽろりと轉がり落ちる。ああ何てうじやうじやしてやがるんだ！　彼奴が食ひ盡くされて、骨と軍服つきりになつたら、今度は――俺の番なんだな。俺もあんなになるんだな。

日が暮れる、一夜が明ける。變りはない。日が高くなる。やはり同じだ。やがてその日も過ぎて行く。……

四日間

藪が搖らいで、ざわざわと鳴る。まるで小聲で話をしてゐるやうだ。

『そら死ぬぞ、そら死ぬぞ、死ぬんだぞ！』と一方の枝葉がささやく。『逢へずになあ、逢へずになあ、逢へずになあ！』と、向ひの藪がそれに應へる。

「逢へずに行くとこだつたぞ、こんな處にゐたんぢやなあ！」と、大きな聲がその邊でした。

俺はぶるぶるつとして、はつと吾に返ると、藪かげから、ヤーコヴレフの優しい碧眼がじつと俺を見てゐる。隊の上等兵だ。

「おい、シャベルだ」と彼は叫ぶ、「ここにもう二つあるぞ、一つは敵のだ。」

『シャベルは要らんよ、俺を埋めんでくれ、生きてるんだ！』と叫ばうとするが、力ない呻きが乾き切つた唇を漏れるばかりだ。

「やあ！　こりやあ生きとるらしいぞ？　イヴァーノフの旦那*ぢやないか！　おおい皆んな、早く來い、旦那が生きとるぞお！　軍醫殿を呼ぶんだ！」

一分もたたぬうちに、口の中へは水、ヴォトカ、それからまだ何やらが注ぎ込まれる。と思ふうちに何の覺えもなくなつた。

＊　旦那＝イヴァーノフは一兵卒ながら貴族の出であるからさう呼んだのである。

調子よく揺れながら、擔架は進んでゆく。その調子のいい揺れ工合が、俺をあやして寢かしつける。目が覺めるかと思ふと、また昏々と眠り入る。傷は繃帶されたのでもう痛まない。何やらかう口では言へない嬉しさが、總身をぞくぞくさせてゐる。……

「止まれえ！　下ろせえ！　看護手、第四交代、前へ！　擔架につけ！　かかれ、擔へえ！」

號令をかけてゐるのは、隊の看護班將校のピョートル・イヴァーノヴィチだ。ひよろひよろと脊の高い、頗る親切な男である。そののつぽさ加減と來たら、大の男が四人がかりで肩に擔いでゆく擔架の上から、俺が眼を返して見やつても、疎ら髯の生えた頤の邊と肩先だけしか眼にはいらない。

四日間

「ピョートル・イヴァーヌィチ！」と俺はささやく。

「何かね、君？」

ピョートル・イヴァーヌィチは上から俺をのぞき込む。

「ピョートル・イヴァーヌィチ、軍醫殿は何と言はれました？　もう駄目なんでせうか？」

「なあんだ、イヴァーノフ、馬鹿を言ひたまへ！　君は大丈夫だよ。骨は一本もやられちやゐないんだ。全く運が好かつたなあ！　骨も動脈も無事なんだよ。だがこの三晝夜半も、よくまた生きてゐられたもんだな？　何を食つてたんだね？」

四日間

「別に何にも。」

「で水は飲んだかね？」

「土耳古兵の水筒です。ピョートル・イヴァーヌィチ、今は口が利けません。あとでまた……。」

「さうともさうとも、ゆつくり寐たまへ、なあ君。」

また昏々と覺えがなくなる……。

氣がついてみると、師團の野戰病院だつた。ぐるりには屏風のやうに醫者の顏、看護婦の顏。まだそのほかに、見知り越しのペテルブルグの有名な教授の顏も見え、俺の脚のうへに踞みこんでをられる。その兩手は血みどろだ。教授は俺の脚のところで暫くごそごそやつてゐたが、やがて俺の顏を見て、

「まづお目出度う、君！　命はとりとめたよ。尤も脚は一本頂戴したがね、なあにそんなもの——何でもないさ。口は利けるかね？」

口は利ける。で俺はここに書いた一部始終を、皆んなに話して聽かせる。

信

號

セミョーン・イヴァーノフは鐵道の線路番を勤めてゐた。彼の番小屋から一方の驛までは十二露里、もう一つの驛までは十露里あつた。四露里ほどの土地に去年大きな紡績工場が立つた。その高い煙突が遙かの森蔭から黑々とのぞいてゐたが、それより近くには、兩隣りの番小屋を別にすると、森番の家ひとつなかつた。

セミョーン・イヴァーノフは病身の、生活に疲れ切つた男であつた。九年前に彼は戰爭に出たことがある。ある將校の從卒を勤めて、遠征の辛苦をつぶさに主人と共にしたのである。飢ゑに苦しみ、寒さに凍え、炎天に爍き焦がされ、その炎天や寒空をついて、日に四十露里から五十露里の强行軍をしたものである。銃火の下に身をさらしたこともあつたが、幸ひとかすり傷ひとつ負はずに濟んだ。ある時などは彼の聯隊が第一線に立つたこともある。そのときは、まる一週間ぶつ通しに土耳古軍と銃火を交へた。味方が戰線を敷いてゐる場所と、窪地一つを挾んで土耳古軍の戰線があり、朝から日暮れまで、時々思ひ出したやうに彈丸を送つてよこすのだ。セミョーンの附いてゐる將校もその戰線にゐた。でセミョーンは日に三度三度、谷間にある聯隊庖厨から、しゆんしゆん沸いたサモヴァルと食事を運んで來てやるのだつた。サモヴァルをさげて暴露地帶

を歩いて行くと、彈丸がひゆうひゆう鳴つて、そこらの石にぴしつぴしつとぶつかる。セミョーンは怖くて、思はず涙が出るけれど、それでも身體は進んで行く。隊の將校連はこの彼に大滿足だつた。彼のお蔭で二六時ちゆう熱い茶を缺かしたことがないからである。彼は無事に戰地から戻つては來たが、ただ手足にレウマチの痛みを覺えるやうになつた。それからこつち、彼の嘗めた苦勞はひと通りではなかつた。家に歸つてみると——年とつた親父は亡くなつてゐた。餓鬼も四つの歳で、咽喉を腫らしてやはり死んでゐた。セミョーンは女房とたつた二人きりになつた。暮らし向きもうまく行かなかつたし、第一あの浮腫の來た手足で地面を耕すのはもともと無理だつた。二人は自分の村に居たたまれないことになつて、新らしい土地へ好いことを搜しに出掛けた。セミョーンは女房を連れて、國境の方へも行つてみたし、ヘルソーンにも、ドン地方にもしばらく足をとめてみた。何處へ行つてもいい芽は出なかつた。たうとう女房は下女奉公に出て、セミョーンは相變らずそこらを流れ廻つてゐた。或るとき汽車で旅をすることになつたが、とある驛に停車したとき、そこの驛長がどうやら見覺えのある人のやうな氣がした。セミョーンが驛長をじろじろ見てゐると、向ふでもやはりセミョーンの顏をじつと見てゐる。やがてお互ひに思ひ當たつた。もとゐた聯隊の將校だつたのである。

「お前イヴァーノフぢやないか？」と相手はいつた。

「はつ、さうであります、旦那樣。私なんであります。」

「何だつてこんな所へやつて來たんだね？」

セミョーンはこれこれしかじかでと、身の上をうち明けた。

「でこれから何處へ行かうといふのかね？」

「それが分からんのであります。」

「なにを馬鹿な、なぜ分からんのか？」

「はつ、さうであります、旦那樣。つまり行くとこがないんであります。何か仕事をみつけなくてはならんのであります。」

驛長はじつと彼を見て、暫く考へてゐたが、やがてかう言つた。

「なあどうだね、當分この驛にゐることにして見ちやあ。お前たしか女房がある筈だな？　女房はどこに置いてある？」

「はつ、さうであります、女房がありますんで。女房はクールスク市の商人の家に下女奉公に行つてをります。」

「ぢや女房に手紙を出して、こつちへ來るやうに言つてやれ。無賃乘車券を何とかしてやらう。ここの線路番の小屋が一つ明くことになつてるんだ。すぐお前のことを保線課長へ申請してやる

としよう。」

「ほんとに有難うございます、日那樣」とセミョーンは答へた。

彼はそのまま驛に足をとめた。驛長の家の勝手仕事を助けたり、薪を割つたり、構内やプラットフォームの掃除をした。二週間すると女房もやつて來たので、セミョーンは手押しのトロッコに乘つて、自分の番小屋へ行つた。番小屋はまだ新らしくて、溫かで、薪ときたら望み放題あるし、野菜畑も小さいながら前の線路番の殘して行つたのがあつたし、半町歩からの耕地も線路の兩側にあつた。セミョーンは嬉しくなつてしまつた。どんな工合に世帶をもつて行かうか、牝牛や馬の一匹も買はうか、などと考へはじめた。

必要な物品はのこらず支給された。青旗、赤旗、手提燈、呼子、ハンマー、止め捩子を締める捩子廻し、鐵梃子、シャベル、箒、ねぢ釘、犬釘、それからまた鐵道規則ののつてゐる薄い本が二册に、列車時間表も渡された。はじめのうちセミョーンは夜の目も寐ずに、時間表をすつかり諳記するのだつた。列車が通るまでまだ二時間も間があるのに、自分の受持區間をひと巡りしたり、番小屋の前のベンチに腰かけて、レールが震動して來はしないか、汽車の音はまだしないかと、絶えず眼や耳を働かせてゐた。規則もすつかり諳で覺えてしまつた。讀む方は不得手で、どうにか綴りを辿り辿り讀む程度だつたが、それでもちやんと諳記してしまつた。

それは夏のことだつた。仕事は辛くはなかつたし、雪を掻く世話もいらなかつた。それにまたこの線には列車が滅多にはいつて來ないので、セミョーンは一晝夜に二度づつ自分の受持區間を見廻つて、そこここの止め捩子を試つてみたり、緩んでゐると見れば締め上げたり、砂利を平らに均らしたり、水管の工合を調べたりして、それから畠の面倒をみに戻つて來る。ところが畠のことになると、厄介なことが一つあつたといふのは、何事にまれやらうと思ふことは一々、線路監督に願ひ出なければならなかつた。その監督から保線課長へ報告を出すといふ譯で、願ひが許可になつて戻つてくる内には、時季が過ぎてしまふのだつた。セミョーン夫婦はだんだん退屈にさへなつて來た。

二た月ほどの時がたつた。セミョーンは兩隣りの線路番と顔馴染みになりだした。一人はよぼよぼの爺さんで、鐵道の方では前々から更迭をもくろんでゐた。殆んど小屋から出たことはなく、細君が代りに線路の見廻りをしてゐた。もう一人の、驛に近い方の小屋にゐる線路番は、まだ若い男で、痔せてこそゐるけれど筋骨逞ましかつた。彼とセミョーンとが初めて顔を合はせたのは、見廻りのとき、お互ひの小屋の中ほどの線路の上でだつた。セミョーンは帽子をとつて、お辭儀をして、

「御機嫌よろしう、お隣りさん」と言つた。

隣りの男は横目でじろりと彼を見て、

「今日は」と言つた。

そしてくるりと背中を向けると、すたすた向ふへ行つてしまつた。その後で女房同志も互ひに顔を合はせる機會があつた。セミョーノフの女房のアリーナは、隣りの細君と挨拶を交はしたが、向ふはやはり餘り口數を利かないで、さつさと行つてしまつた。セミョーンもある時その細君を見掛けたので、

「ねえお新造さん、あんたの御亭主はどうしてあんなに無口なんですね？」と言つてみた。

女房はちよつと默つてゐたが、やがてかう言つた。

「けどね、一たい何をあの人がお前さんとお喋りすることがあるの？　誰だつてみんな自分の仕事があるんだもの……お前さんも歸つて仕事をしたがいいでしよ。」

とはいへ、それから一と月もすると、二人は懇意になつた。セミョーンとヴァシーリイは線路のうへで落ち合ふと、土手の緣に腰をおろして、互ひにパイプをふかしながら、めいめいの身上話をするのだつた。ヴァシーリイの方はどつちかと言ふと聽き役で、セミョーンが自分の村のこと や戰地のことを、話してきかせた。

「かう見えても」と彼は言ふのだつた、「俺も隨分と苦勞して來たものさ。それに老い先ももう

長くはねえんだ。つまり俺は、仕合はせを授からなかつたのさ。一たん神樣がある運勢をその人にお授けなすつた以上は、もうそれつきり動かしやうもないんだ。まつたくよ、なあヴァシーリイ・ステパーヌィチ。」

ずるとヴァシーリイ・ステパーヌィチは、パイプを線路の端でぽんと叩いて、立ちあがつてかう言ふ。

「うんにや、お前や俺の一生を臺なしにしやがるのは、運勢なんてもんぢやあねえ、人間どもなんだ。まつたくこの世の中に、人間ほど强欲で性の悪い獸はねえよ。狼は共喰ひなんかしねえが、人間と來た日にや生き身の人間をぼりぼり喰ふんだ。」

「いいや兄弟、狼は共喰ひをやるぜ、そんなことを言ふもんぢやねえよ。」

「ひよいと口に出たんで言つたまでよ。とにかく人間くれえ慘い生き物はねえぜ。これで人間が性惡でも强欲でもなかつたら、俺らの暮らしも立たうになあ。見ねえ、どいつも此奴もお前の生き身に爪を立てようと狙つてるんだ、肉を剝ぎとつて啖ひつかうと牙をといでるんだ。」

セミョーンは考へ込んでしまつた。

「俺にや分かんねえけどね、兄弟」と彼は言ふ、「ひよつとしたらさうかも知んねえ。だがもしさうとすりや、それにはそれでちやんと神樣の思召しがあるんだあね。」

「だがもしさうとすりや」と、ヴァシーリイは相手の言葉尻をとつて、「俺らがかうして話をすることも要んねえ譯だ。胸糞の惡いこたあ殘らず神樣に背負はしちまつて、お手前は坐り込んでじつと辛抱してるんなら、そいぢやあもう兄弟、何も人間樣なこたあ要らねえ、畜生で結構だ。俺の言ひてえのはそいだけよ。」

と言ひ棄てて、くるりと背中を向けると、あばよとも言はずに行つてしまつた。セミョーンも立ちあがつた。

「おおい隣りの人」と大聲で、「何だつてさう惡態をつくんだい？」

隣りの男は振り向きもせず、ずんずん行つてしまつた。セミョーンはそのまま、ヴァシーリイの姿が切通しの曲り角に見えなくなるまで、長いことじつと見送つてゐた。家へ歸つて來ると、女房にかう言つた。

「なあ、アリーナ、俺らの隣りの奴あ、ありや惡玉だぜ、人間ぢやねえ。」

とはいへ二人は仲違ひをしたのではなかつた。そのうちまた顏を合はせると、相變らず話をしだしたが、話の題目は同じことだつた。

「ええ兄弟、もし人間どもがかうも……何でなかつたら、お互えに番小屋なんぞにくすぶらねえでも濟んだんだぜ」とヴァシーリイは言つた。

「番小屋がどうだと言ふんだね……結構、暮らして行けるぢやねえか。」

「暮らして行ける、ふん暮らして行けるか……。駄目だなあ、お前は！ 色んな世渡りをして來たくせに、さつぱり世間といふものが分かつちやゐねえ。色んなことを見て來たくせに、さつぱり正體が見えちやゐねえ。貧乏人といふものは、ここらの番小屋にゐようがゐまいが、どつちみち人間らしい暮らしは出來ねえんだ！ そこいらの人食ひ鬼どもに、お前は食はれてるんだぜ。生血のありつたけを搾つちまつて、お前が老いぼれになつてくると——まるで油粕か何かみたいに、ぽいと豚の餌に吳れちまふんだ。お前、給料はいくら貰つてるね？」

「うん、大したこともないさ、ヴァシーリイ・ステパーノヴィチ。十二ルーブルだよ。」

「俺あ十三ルーブルと半分だ。そこでお伺ひ申すが、こりや一體どうした譯だね？ お上の規則ぢや誰彼問はず一律に、月十五ルーブルの手當に、薪や油がつくことになつてるんだ。一たい誰が、お前が十二ルーブルで俺が十三ルーブル半だと、そんな決め方をしやがつたんだ？ ええ、伺ひてえもんだね？……だのにお前は、暮らして行けると仰しやるんだ！ 斷つて置くけど、高が一ルーブル半だの三ルーブルだののことを、彼是いふんぢやないんだぜ。十五ルーブルまるまる吳れたにしたつて同じことなんだ。俺は先月、停車場に行つたつけがね、そこへ局長が汽車で通りかかつたのを、俺はこの眼で見たんだ。まあ拜んだといふ譯かな。奴さん別仕立ての客車に

納まつてたが、やをらプラットフォームに降り立つて、そつくり返つてゐやがつた。……まあさ、俺が此處にゐるのも長いことぢやねえぜ。出て行くんだ、足の向く方へな。」

「出て行くつて何處へ行くんだね、ステパーヌィチ？　あんまり上を見ると碌なこたあないぜ。ここにゐりやお前、家もあるし、温かだしさ、小さいながら畠地もあるんだ。それにおかみさんは働き者だしさ……。」

「畠地だと！　まあ俺んとこの畠を見てから言つて呉れ。枯れ枝一本立つちやゐねえんだ。この春キャベツを植ゑたんだがね、するてえと忽ち監督の奴が飛んで來て、『こりや何ちふことだ？』とかうなんだ、『なぜ願ひ出んのか？　なぜ許可を受けんか？　根こそぎそつくり掘つ返しちまへ。』奴さん酔拂つてたんだ。これが素面のときだつたら、見て見ぬ振りで濟ましたに違ひねえのに、その時は妙に依怙地になりやがつてね……『三ルーブルの罰金だ！……』と來た。」

ヴァシーリイは口を噤むと、パイプを二た吸ひ三吸ひしたが、やがて小聲で、

「すんでのことで、あいつ死ぬほど打ちのめして呉れるとこだつたよ。」

「なあ、隣りの人、何ぼ何でもお前さんは氣が早すぎるよ。」

「氣が早いんでも何でもねえさ、ただ筋の通つたことを言つたり考へたりするまでよ。まあその中にきつと返報はして見せるぞ、茹で章魚め。保線課長へ直訴してやるんだ。今に見ろよ！」

そして實際、彼は直訴をしたのである。

あるとき保線課長が線路の檢分にやつて來た。もう三日すると、ペテルブルグのお偉い方々がその線を通過する筈だつた。それが檢閲といふ觸れ込みなので、その一行の通過に先だつて、萬事きちんと整頓しておく必要があつたのだ。砂利を敷き足し、きれいに均らし、枕木を一々檢査し、犬釘を打ち直し、止め捩子を締めなほし、杙は塗りかへ、踏切には黄色い砂を撒き足すやうにとのお達しが出た。隣りのおかみさんまでが、例の爺さんを草取りに追つ立てる騒ぎだつた。セミョーンはまる一週間せつせと働いた。線路の方がすつかり片附くと、自分の長上衣の綻びも繕ひ、きれいにブラシをかけて、眞鍮の徽章は煉瓦でもつて、ぴかぴかになるまで磨き上げた。ヴァシーリイも働いた。課長がトロッコでやつて來た。工夫が四人がかりでハンドルを廻して、齒車がぶんぶん唸つてゐた。そのトロッコで一時間に二十露里もぶつ飛ばすので、ただもう車輪がごうごう鳴つてゐた。セミョーンの小屋の前へすつ飛んで來た。セミョーンはそこへ跳んで出て、軍隊式に報告をした。

萬事遺漏のないことが分かつた。

「お前は以前からここにをるのか？」と保線課長はきいた。

「五月の二日からであります、閣下。」

「よろしい。御苦勞ぢやつた。して百六十四番の小屋は誰かな?」
線路監督は同じトロッコで隨行してゐたが、それに答へて、
「ヴァシーリイ・スピリドーノフでございます。」
「スピリドーノフと、スピリドーノフと……。ははあ、去年君が注意人物ぢやと言うてをつた、あの男だな?」
「左樣でございます。」
「ふむ、よしよし。そのヴァシーリイ・スピリドーノフの方を見よう。出せ。」
工夫たちはハンドルにしがみついた。トロッコは先へ進んで行つた。
セミョーンはその後ろを見送りながら、かう考へた、『こいつああの連中、隣りの奴とひと悶着おこすぞ。』
それから二時間ほどすると、彼は見廻りに出て行つた。すると向ふの切通しのところから、線路づたひにやつて來る人影が見えた。頭の邊に何やら白いものがちらちらしてゐる。セミョーンが眼を凝らしてみると、それはヴァシーリイだつた。杖を片手に、小さな包みを肩にかけて、片頰には布ぎれを卷きつけてゐる。
「隣りの人、どこへ行かうつてんだね?」とセミョーンは呼びかけた。

ヴァシーリイはすぐ鼻先へやつて來た。まるで顏色はなく、白墨のやうに白かつた。眼は獸のやうにぎらついてゐた。口を利きだすと――聲はとぎれ勝ちだつた。
「都へ行くんだ」と彼は言つた。「モスクヴァへ行くんだ……本省へな。」
「本省へ……。うん讀めた! ぢやあ訴へに行くんだね? よしなよ、ヴァシーリイ・ステパーヌィチ、忘れちまへよ……。」
「うんにや、兄弟、忘れる譯にや行かねえ。忘れるにやちと手後れなんだ。見ねえ、あいつ俺の面を張りやがつたんだ、かうして血まで出しやがつたんだ。生きてる限りは、忘れる譯にや行かねえ、このまま濟ます譯にや行かねえんだ!」
さういふ彼の手をセミョーンは取つた。
「やめにしろよ、ステパーヌィチ。俺あ惡いこたあ言はねえ、そつとしとくが身の爲めだぜ。」
「何が身の爲めだ! そつとしとくが身の爲めだぐれえ、俺だつて百も承知だあ。お前は運勢のことを言つてたつけが、今になつてみりや成る程と思ひ當たらあ。みすみす身の爲めにやならねえと知りながら、正義のためにや、兄弟、やつぱり一歩も退けねえものなあ。」
「だがまあ聞かうぢやないか、一體どうしてそんな事になつたんだね?」
「うむどうしてつて……。彼奴め何から何まで檢査しやがつたんだ、わざわざトロッコを降り

て、小屋の中まで覗きやがつたんだ。てつきり小喧しいことを抜かすだらうとは、こつちも覺悟の前だつた。だから萬事手抜かりなく整頓しといたのよ。そこでまあ無事にトロッコへお戻りにならうとした矢先に、俺が例の直訴をもち出したといふ譯さ。いや奴さん、聞くが早いかが鳴り立てたぜ。『いやしくも』つて抜かすんだ、『政府の檢閲があるといふのぢやぞ、それを何といふ奴だ、野菜畠の不服なんぞを持ちだすとは！』と、かうなんだ、『三等官の方々がお見えになるといふんぢやぞ、それをお前はキャベツのことなんぞをつべこべ言ひをる！』俺は腹を据ゑ兼ねて、つい厭がらせを言つちまつた。なあに別に大したことぢやないんだがね、それが妙に奴さんの氣に障つたんだな。いきなりぶうんと拳固が飛んで來た……だが俺はじつと齒を喰ひしばつてゐた、さうされるのが理の當然だといつた風にな。奴等が行つちまふと、俺ははつと氣がついて、顏の血を拭くと、かうして出掛けて來たのよ。」

「で、小屋の方はどうするつもりだい？」

「嬶が殘つてらあな。あれが抜目なくやつて呉れらあ。それに奴等がどうならうと、奴等の線路がどうならうと、俺の知つたことぢやねえしな！」

ヴァシーリイは立ちあがつて、身支度をした。

「あばよ、イヴァーヌィチ。訴へが聽き屆けて貰へるかどうか、分かんねえけどなあ。」

「お前さん徒歩で行くつもりかい？」

「停車場で貨車に乘つけて貰ふつもりだ。明日はもうモスクヴァさ。」

隣り同志は別かれを告げた。ヴァシーリイはそのまま出掛けて行つて、なかなか戻つては來なかつた。女房は彼の代りに、晝はもとより夜の目も寐ずに働いた。亭主の歸りを待ちわびて、げつそり窶れてしまつた。三日目になると檢閲の一行がやつて來た。機關車に手荷物車が一輛、それに一等車が二輛ついてゐた。だがヴァシーリイの姿は相變らず見えなかつた。四日目にセミョーンは、彼の女房を見かけた。顏を泣き腫らして、眞赤な眼をしてゐた。

「御亭主は戻りなすつたかね？」と訊いてみた。

女房は片手を振つて見せると、ひと言も口を利かずに、自分の小屋の方へ行つてしまつた。

セミョーンはその昔、まだ頑是ない子供のころに、猿柳の枝で笛を作ることを習ひ覺えてゐた。柳の枝の芯を燒きぬいて、要所々々に錐で孔をあけ、一方の端に歌口をこしらへると、見事に音色をととのへて、何なりとお望みの曲が吹けるやうに仕上げるのだつた。彼は役目の暇々にさうした笛を澤山つくつて、懇意な貨物列車の車掌にたのんで、町の市場へ出して貰つてゐた。一本

あたり二コペイカのお錢になつた。あの檢閲があつて三日目に、彼は夕方六時の汽車の見張りに女房を小屋にのこして、自分は小刀をもつて、柳の枝を仕入れに森へ出かけた。受持區域の外れまで來ると――そこで線路は急カーヴをしてゐた――彼は土手を降りて、森の木の間をだらだらと下りて行つた。半露里ほど先に大きな沼があつて、その畔りに例の笛の材料にはお誂へむきの見事な猿柳の叢林があつた。彼は一抱へほども枝を切ると、そのまま家路についた。森の中をわけて行く。日はもう西に傾いて、あたりはひつそりと死んだやうな靜けさ。聞こえるのはただ、チチと呼びかはす鳥の聲と、足もとに踏みしだいてゆく枯枝の響きだけだつた。それから少し行つて、間もなく線路の土手に出るといふあたりで、何かほかの物音が聞こえるやうな氣がした。どこかそこらで、鐵と鐵とがかすかに打ち合ふやうな音だつた。セミョーンは足を早めた。その日ごろ彼等の受持區間に修理は行はれてゐなかつた。『あの音は何だらう?』と心に思つた。やがて森の外れへ出ると、眼の前は見上げるやうな鐵道の土手だつた。その土手の上に一人の男がしやがみ込んで、しきりに何かやつてゐた。セミョーンはそつとその男の方へ登つて行つた。どこかの奴が止め捩子を盗みに來たんだなと思つたのだ。じつと見てゐると、やがて男は立ちあがつた。手には鐵梃子を握つてゐた。つまり鐵梃子でもつてレールの床を緩めて、外れるやうにした譯だ。セミョーンは眼のなかが暗くなつてしまつた。喚かうとしたが、聲が出なかつた。それ

がヴァシーリイだと見てとると、彼は逸散に駈けあがつたが、相手は鐵梃子と捩子廻しを抱へたまんま、土手の向ふ側から鞠のやうにころげ降りてしまつた。

「ヴァシーリイ・ステパーヌィチ! お願ひだ、いい子だから戻つて來て呉れよう! 鐵梃子を借して呉れよう! レールを直すんだ、誰にも知れやしないんだ。戻つて來て呉れ、畜生道へ落ちないで呉れよう。」

ヴァシーリイは振り向きもせずに、森の中へ逃げ込んでしまつた。

セミョーンは外されたレールの傍につつ立つてゐた。抱へてゐた枝束をどさりと落とした。今度の列車は貨物ではなくて客車なのだ。停車させようにも手立てがなかつた。旗がないのである。レールを元通りに直さうにも、素手では犬釘も打てはしない。かうなつたら駈けだすほかはない、何か道具をとりに小屋へ駈けつけるほかはない。神樣、お助けください!

セミョーンは自分の小屋をさして走つた。息ぎれがする。それでも走つた――へたへたと今にも前へつんのめりさうになる。やつと森を駈け拔けて、有難や小屋まではもう二町そこそこだと思つた途端に、ふと耳に工場の汽笛の鳴るのが聞こえた。六時だ。六時二分には列車が來る。あゝ神樣! 罪なき人々の命をお救ひ下さい! 祈るひまにもセミョーンの眼にまざまざと浮かぶのは、機關車が左の車輪をレールの切れ目に引つかけて、ぐんと一搖れ、たちまち横へ傾いで、

枕木を蹴やぶり、木つ端みじんに撥ね散らす光景だ。おまけにあすこはカーヴだ、曲り角なのだ、それに高い土手と來てゐる。列車はあはやといふ間もなく、十二三間もの谷底へ逆落としだ。その三等車には、ぎつしりと鮨づめの客、なかにはいたいけな子供もゐよう……。それが皆んな今、一寸先の危難も知らずに坐つてゐるのだ。神様、どうすればいいのかお教へ下さい！……ああもう遲い、小屋へ駈けつけてそれから現場へ戻つたんぢや、とても間に合はない……。

セミョーンは小屋まで駈けつけぬうちに、くるりと後ろ向きになると、前より一層の速力で駈けだした。殆んど無我夢中で、この先どうなることやら自分でも知らずに、ひた走りに走つた。外されたレールのところへ駈け戻つて見ると、例の枝がうづ高く散亂してゐた。彼は身をかがめて、その一本を引つつかむと、何の心算かは自分も知らずに、そのまま先へ駈けだした。もう列車の近づく氣配がしてゐた。遙かに汽笛の音がきこえ、レールが微かに規則正しい震動を傳へはじめてゐた。もうそれ以上は走る力がなかつた。彼は怖ろしい場所から百間あまりの所で立ちどまつた。その時ふと、一條の光明がさつと頭に閃いたのである。彼は帽子をぬぐと、その中から木綿のハンカチを取りだした。それから長靴の胴へ手を入れて、小刀を取り出した。そして十字を切つた、――『主よ、惠みたまへ！』と。

その小刀を彼は矢庭に、自分の左の二の腕へつつ刺した。血はさつと噴きでて、熱い流れをな

して迸つた。彼はその血潮にハンカチを浸して、皺をのばして擴げると、枝の先に結へつけて、わが血に染めた赤旗をかかげた。

彼はつつ立つたまま、その旗をしきりに打ち振る。汽車はもう見えてゐた。旗は機關手の眼にはいらぬと見え、ぐんぐん汽車は近づいて來る。ここまで來たらもう最後だ――百間あまりの距離では、あの重たい列車が停められるものか！

血はあとからあとから噴きでてくる。セミョーンは傷ぐちを小脇へ押しつけて、口を塞がうと思ふのだが、血はいつかな止まらない。どうやら腕を深く切つたと見える。そのうちに眩暈がして來た。眼のなかに黑い斑の影がちらちらし出したかと思ふと、やがて眞の闇になつてしまつた。耳の中ではがんがんとしきりに鐘が鳴る。彼にはもう汽車の姿も見えず、その轟きも聞こえない。頭に渦まく考へはただ一つ――『もう立つてはをられぬ、俺は倒れる、ああ旗が落ちる。あの汽車は俺のところを走り拔けるんだ……お助け下さい、主よ、誰か代りを早く……。』

と思ふうちに眼のなかは暗くなりだし、心は空ろになつて、彼は旗をとり落とした。しかし血染めの旗は地面へ落ちはしなかつた。何者かの手がむんずとそれをひつ摑むと、轟々と近づいてくる列車に向かつて高く振り上げたのだつた。機關手はそれを認めて、調整器の瓣をとぢると、蒸氣を切りかへた。列車はとまつた。

車室からどやどやと飛びだして來た人々が、たちまちまはりに黑山をきづいた。見ると、全身紅に染まつた男が、氣を失つて倒れてゐた。もう一人の男はその傍に、血だらけの襤褸布のついた棒を握つて佇んでゐた。

ヴァシーリイはぐるりと一同を見廻すと、そのまま首をおとして、

「あつしを縛つてお呉んなさい」と言つた、「あつしがレールを外したんだ。」

夢がたり

六月のある素晴らしい日のこと――但し素晴らしいと月並みなお斷りをしたのは、列氏で二十八度といふ溫度だつたからですが――その素晴らしい六月のある午後のこと、どこも彼處もきびしい暑さでした。なかでもつい四五日まへに刈入れの濟んだ乾草が、禾堆（いなむら）をなして並んでゐる庭の草場は、またひとしほの暑さでありました。といふのはその場所が、茂りに茂つた櫻畑で、風上を遮られてゐたからなのです。生きとし生けるものは、大てい寐入つてをりました。人間どもはどつさり御飯をつめ込んで、晝寢の夢をむさぼつてゐましたし、小鳥も鳴りをひそめてゐますし、昆蟲たちも大抵は日ざしを避けて、どこかへ潛り込んでゐたほどでした。家畜のことは申すまでもありません。大きな家畜も小さな家畜も、みんな檐下（のきした）にかくれてをりました。犬はどうかと言ひますと、穀倉の下に穴を掘つて、その中に寢そべつて、半ば眼を閉ぢたまんま、一尺あまりもありさうな桃色の舌を吐きだして、しきりにハアハアいつてをりました。ときどき犬は、このうだるやうな暑氣のもよほす物憂さに堪へかねてでありませう、咽喉の奥からキューンと妙な音が出るほどの、大きな欠伸をするのでありました。豚はどうかといひますと、お母さんが總勢すぐつて十三匹の仔豚を引きつれて、小川の岸へ下りて行つて、ぶくぶくした黑い泥んこの中に

蹲つてしまひましたので、泥の中から見えるものといつたら、ブウブウグウグウ鳴つてゐる小さな孔が二つづつあいてゐる豚の鼻面と、泥んこになつた細長い背中と、それに垂れ下がつてゐる見つともないほど大きな耳だけでありました。ただ鷄だけは、暑さにもめげずに、臺所の登り口の下のからからに乾いた地面を、しきりに趾でほじくりながら、どうにか時間つぶしをしてゐましたけれど、そこにはもう鷄たちも先刻ご承知のとほり、穀粒ひとつだつて殘つてはゐないのです。とは知りながらも、雄鷄はときどき何か癪にさはることがあると見えます。その證據には、雄鷄はときどき間の抜けた樣子をして、咽喉もさけよと叫び立てるのでした、――『結構ドコロ　ヂヤアリヤシナーイ!!』

おや、いつの間にか私達は、あの一ばん暑さのきびしい草場を離れて遠くへ來てしまひましたが、實はその草場には、畫寢もせずにゐるお歴々が、車座になつて坐つてゐたのでした。といつても皆んなが皆んな坐つてゐたわけではありません。例へば年寄りの栗毛などは、馭者のアントンの鞭を横つ腹へ喰らひはしまいかと絶えずびくびくしながら、乾草の山を掻き分けてゐるのですが、これは馬のことですから、もともと坐るなんて藝當はできないのです。またゆくゆくは何かの蝶になる毛蟲も、やはり坐つてゐるのではなく、まあ腹ん這ひになつてゐる方でした。でも言葉の穿鑿なんぞはどうでも宜しい。とにかく櫻の樹蔭に、小人數ではありますが、大へん眞面

目な會合が開かれてゐたのでありました。蝸牛もゐれば、糞蟲もゐます。蜥蜴もゐれば、いま言つた毛蟲もゐます。蟋蟀も駈けつけて來ました。傍には年寄りの栗毛までが佇んで、鼠色の耳毛が中から勢ひよく生えてゐる大きな片耳を、一座の方へ欹てながら、連中の演說をじつと聽いてをりました。その背中には、蠅が二匹とまつてをりました。

さて一座の面々は、言葉こそ鄭重ではありましたが、それでもかなり活氣のある議論を闘はしてをりました。且つまた、かうした場合の御多分に漏れず、誰一人として相手の意見に贊成するものはありませんでした。てんでに自分たち獨特の考へ方や氣質によつて、勝手な熱をあげてゐたからであります。

「私に言はせると」と、糞蟲が申しました、「いやしくも道を辨へた動物は、まづ何よりも子孫のことに思ひを致すべきです。生活は來たるべき世代のための勞働なのである。かうした自覺を抱いて、大自然が己れに課し與へた義務を果たさうとする者こそ、確乎たる地盤のうへに立つ者と言ふべきであります。けだし彼は己れの分を知るがゆゑに、たとへ何事が起こらうと、彼は責任を問はるべきではないからであります。この私を御覽なさい、私ほどよく働く者がほかにありますか？　そもそも誰が日がな一日、息をつく暇もなしに、あのやうに重い團子を――すなはち、やがて生まるべき私同樣の糞蟲たちが、すくすくと生長し得るやうにとの大目的を以て、糞を材

料に私が斯くも手際よく作りあげた團子を、せつせと轉がしてゐるでありませうか？　しかもその代り私は、やがてこの世に新らしい糞蟲が生まれ出るとき、『然り、わが輩は爲し得るところのものを、また爲すべかりしところのものを、悉く爲しとげたのだ』と私が言ふであらうやうに、かくも平らかなる良心をもつて、また一點の曇りなき衷情をもつて、言ひ切れる者が他にあらうとも思はないのであります。諸君、勞働とは實にかくの如きものであります！」

「おつと兄弟、さう勞働々々と大きな口を滅多に利いては貰ひますまいぜ！」と、ちやうど糞蟲の演說のとき、丸太ほどもある枯草の莖の切れつぱしを、暑さにもめげず曳きずつてゐた一匹の蟻が、さう申しました。蟻はちよつと立ちどまつて、四本の後脚で地面に坐り、窶れた顏にしたたる汗を、二本の前脚で拭きました。――「僕だつて、そら、この通り勞働はするんだぜ。それもお前さんなんかより働きは激しいくらゐだ！　それにお前さんは自分のために働くんだらう、でないまでも結局はお前さんの子孫のためだらう。ところが皆んなが皆んな、そんな果報者ぢやないんだぜ。……物は試しだ、まあお前さんもこの僕みたいに、お上の御用で丸太ん棒を曳きずつて見るがいいや。こんな暑さの中でまで、精も根もつき果てるほど働いてゐながら、さて何處のどいつが僕をかうまでこき使ふのやら、僕は自分でも知らないのさ。いくら働いてやつたところで、有難う一つ言つちや貰へないんだ。僕たち不仕合はせな働き蟻といふものは、みんなかう

して働いてるんだが、僕達の暮らしがそれで少しでもよくなるかい？　みんな背負つて生まれた運命なのさ！……」

「糞蟲さん、あんたみたいに人生を觀ちや、あんまり無味乾燥といふものですよ。だが蟻さんも、人生をあまり暗く考へ過ぎますねえ」と、蟋蟀が二人に反對しました、「そんなもんぢやありませんよ、糞蟲さん、僕はかうしてコロコロ啼いたり、跳ね廻つたりするのが大好きですが、それで一向平氣ですよ！　べつに氣が咎めたりはしませんよ！　それにまたあなたは、さつき蜥蜴の奥さんが提出なすつた問題に、ちつとも觸れなかつたぢやありませんか。奥さんは、『世界とは何でせう』とお尋ねだつたのですよ。だのに自分のお團子の話をするなんて、それぢや寧ろ失禮と言ふもんぢやありませんか。世界とは――世界といふものは、僕に言はせると、かうして僕等の爲めに若草があり、太陽があり、そよそよ風がある以上、頗る結構なものだと思ひますね。それにまた實に大きなものですよ！　あんたなどは、かうしてこの樹とあの樹のあひだを天地として暮らしてをられるから、世界がどれほど大きなものかと云ふことに就いては、とても理解が行く筈はありませんよ。僕はよく耕地へ行つて見ますがね、そこで時々、思ひつきり高く跳びあがつて見るんです。そして正直な話が、とても高いとこまで跳びあがれるんですがね、その高みから見渡すと、つくづく世界には際限がないと思ひますねえ。」

「全くその通りぢや」と、分別顔で栗毛の馬が合槌をうちました、「とはいふもののお前さん達はみんな、わしがこの歳までに見て來たものの、百に一つも見られはせんのぢやよ。お氣の毒ぢやがお前さん達には、一里がどんなものぢややら見當がつくまい。……ここから一露里行つたところには、ルパーレフカといふ村がある。わしは毎日その村へ水を汲みに、樽を背負つて出掛けるのだ。だがあの村ぢや一ぺんだつて飼料を呉れたことがないな。それからまた別の方角には、エフィーモフカだのキスリャーコフカだのといふ村がある。この後の方には教會といふものがあつてな、鐘がころんころんと鳴つてをる。その先はスヴィヤト・トローイツコエ村、またその先はボゴヤーヴレンスクぢや。ボゴヤーヴレンスクでは、行くたんびに乾草を呉れるが、あすこの乾草は風味がよくない。だがほれ、ニコラーエフへ行くと――これは此處から二十八露里もある町ぢやがな、あすこの乾草はなかなか好えし、それに燕麥の御馳走も出るのぢや。ただどうも彼處へ行くのが厭でならんといふのは、あの町へ行くときは旦那を馬車に乘つけて行くのでな、馭者といふものが旦那の言ひつけでわし等を驅り立てるのぢや。いやその馭者の振りおろす鞭の痛いの何のつて……。まだそのほかに、アレクサンドロフカ、ペロジョールカなどいふ村もあるし、ヘルソーンといふのもある――これも町ぢや。……ぢやが折角かうして話して聽かせても、お前がたにはさつぱり譯が分かるまいて！……世界といふものは先づかうした物ぢや。それで全部と

は行かぬにしても、まあま、とにかく大部分ぢやよ。」

さう言つて栗毛は口をつぐみましたが、下唇だけはまだもぐもぐと動いてゐて、まるで何か呟いてゐるやうでありました。それは寄る年波のせゐだつたのです。何しろもう十七歳でしたし、馬の十七といへば人間の七十七も同じことですから。

「折角の馬さんのお話ですが、私には何のことやらちんぷんかんぷんですわ。それにまた正直のところ、別に分かりたいとも思ひませんの」と蝸牛が申しました、「私は牛蒡さへあれば結構なんですが、有難いことに牛蒡は充分ありますのよ。だつてこれでもう四日も這つてゐますけど、まだ頂ける葉が盡きは致しませんものね。この牛蒡の向ふにはまた牛蒡が生えてゐますわ。その牛蒡のうへには、きつとまた蝸牛がとまつてゐるんでせうよ。私の申しあげたいのはこれだけですわ。上へだつて下へだつて、跳ねることなんか一切無用ですわ――そんな事はみんな、くだらない、いい加減な嘘つぱちですわ。お行儀よく葉のうへに坐つて、その葉を食べてゐればいいんですわ。ああ、這ふのさへ面倒でなかつたら、とつくに貴方がたのところは御免を蒙つてゐるのにねえ。そんなお話を伺つてゐると頭痛がして來ますわ。頭痛がして來るだけですわ。」

「いや、お話中ですが、それはまた何故ですね？」と、蟋蟀が遮りました、「喋るといふことは殊にそれが永遠だとか何だとか、まあさういつた類ひの立派な題目に關する場合、じつに愉快な

ことぢやありませんか。そりや勿論、世帯じみた生まれつきといふものもあります。その連中はただもう、如何にしてお腹をくちくするかといふことばかり、くよくよしてゐるんです。例へばあなただとか、またそこに居られる艶やかな毛蟲さんみたいにね。……」

「あら、いけませんわ、私をお構ひになつちやいけませんわ。お願ひですからそつとして置いて頂戴、構はないで頂戴！」と、毛蟲は哀れつぽい聲で叫びました、「私がかうして葉つ葉をいただくのは、未來の生活のためなんですもの。ただただ未來の生活のためなんですもの。」

「未來の生活のためとかお言ひだが、この先まだどんな生活があるのかね？」と、栗毛の馬がたづねました。

「まあ小父さん、あんたは知らないの、私が一ぺん死んで、だんだらの綺麗な翅をした蝶々になつて生まれ變ることをさ？」

栗毛も蜥蜴もまた蝸牛も、さうとは知らずにゐたのですが、昆蟲たちはどうにか知つてだけはをりました。そこで一座の話はしばらくとだえました。誰一人として、未來の生活について條理の立つた文句の言へる者がなかつたからでありました。

「確乎たる信念には、よろしく敬意を拂ふべきですな」――やがて蟋蟀が、コロコロ申しました、「まだ何か仰しやりたい方はありませんか？　あなた一つ如何です？」と、蟋蟀が二匹の蠅に

向かつて申しましたので、年上の方がかう答へました。

「私どもは、べつに不仕合はせな暮らしをして參つたとも申せませんわ。私どもは今しがた、お邸の部屋から出て參りましたの。ちやうど奥様がジャムを澤山に煮て、淺い鉢に分けていらしたので、私どもは蓋の下へもぐり込んで、どつさり頂戴しましたわ。私どもは何の不足もございません。お母さんはジャムに脚をとられてしまひましたけど、今更どうしやうもありませんわ。それにお母さんはもう隨分と長生きをしたんですものね。とにかく私どもは何の不足もございませんわ。」

「皆さん」と蜥蜴が申しました、「あたくしは、皆さんの仰しやることは一々ご尤もだと存じます！　しかしまた、一面から申しますと……」

けれど蜥蜴は、一面から言ふとどうなるのか、その先はたうとう言はず仕舞ひになりました。なぜといつて、そのとき不意に何ものかが、彼女の尻尾をぎゆつと地面へ壓しつけたのを、感じたからでありました。

それは晝寢の夢からさめた馭者のアントンが、栗毛を迎へにやつて來たのでありました。アントンが大きな長靴で、その會合の席へ踏み込んで、一座の者を壓しつぶしてしまつたのでありました。無事だつたのは二匹の蠅だけで、これはジャムだらけになつて死んでしまつた母親のから

だを舐ぶりに、さつさと飛んで行きましたし、一ぱう蜥蜴は命からがら、尾をちよん切られたまで逃げ出しました。アントンは栗毛の鬣をつかまへて、庭から引き出して行きました。それは樽をつけて水を汲みに行くためでした。途々アントンは、『ドオドてばよお、ええ、このよぼよぼの痩せ馬め！』と口小言をいふのでしたが、栗毛はその返事にただもぐもぐと口を動かすだけでした。

さてあの蜥蜴は、尾なしの蜥蜴になりました。尤も二三週間すると、尻尾がまた生えはしましたが、生えた尾は何時までたつても變に先つぽの尖がつてゐない、黒つぽい尻尾でありました。で蜥蜴は、一たいどうして尻尾に怪我をしたのかと尋ねられますと、小さくなつてかう答へるのでありました。

「あたくしは自分の信念を述べようと決心したばかりに、かうしてちよん切られてしまひましたの。」

まつたく蜥蜴のいふ通りでした。

アッタレーア・プリンケプス

とある大きな町に植物園があつて、園内には、鐵骨と硝子づくりのとても大きな溫室がありました。大そう立派な溫室で、すんなりと恰好のいい渦卷形の圓柱が列をなして建物の重みを支へ、その圓柱には、枝葉模樣をきざんだ迫持(アーチ)が、かるがると靠れかかつてをりました。その迫持のあひだには、鐵の枠どりがさながら蜘蛛の網(いと)のやうに一面に組みあげられて、それに硝子が嵌めこんでありました。とりわけ太陽が西に沈みかけて、赤々とした光を浴びせかけるとき、この溫室はまたひとしほの美しさでありました。そのとき溫室は一面にぱつと燃えたつて、眞紅の照りかへしがきらきらと五彩に映えわたる有樣は、さながら細(こま)かに磨きをかけた巨きな寶石を見るやうでありました。

透きとほつた厚い硝子ごしに、なにか閉ぢこめてある植物の姿が見えるのでありました。ひろびろした溫室ではありましたが、それでも中にゐる植物たちにとつては窮屈でありました。根といふ根は互ひにまつはりついて、お互ひの水氣(みづけ)や養分を奪ひ合ふのでした。樹々の枝は、とても大きな棕櫚の葉と入れまじつて、それを押しひしやげたり、裂きやぶつたりしてゐる一方では、自分たちもてんでに鐵の枠へのしかかつて、曲がりくねつたり折れたりしてをりました。園丁た

ちは休む間もなしに樹々の枝を刈り込んで、棕櫚の葉の方は針金でからげ上げて、勝手きままに伸びさせないやうにするのでしたが、それでも大して利き目はありませんでした。草木の身にしてみれば、ひろびろとした天地が、生まれ故郷が、そして自由が要るのでありました。その植物たちは熱帶地方の產で、榮耀な暮らしに慣れた華奢な生まれつきでしたから、故郷のことが忘れられず、南の空が戀しくてなりませんでした。硝子ばりの屋根がいくら透明だといつても、それは晴れわたつた大空ではありません。冬になれば、時をり硝子の凍りつくこともあります。すると溫室のなかは眞暗になつてしまひます。風は吼えたけつて、鐵の枠につき當たり、びりびりと顫はせるのでありました。屋根には雪の吹き溜まりがかぶさつてしまひます。草木は佇んだまま、吼えたける風の音に耳を澄ましては、自分たちに生氣と健康を吹きこんで呉れる、これとは違つて暖かい、しつとりと濡れた風のことを思ひ出すのでした。するとまたあの風の息吹きに觸れてみたくなるのでした。あの風に自分たちの枝をそよがせ、自分たちの葉をさらさらいはせて見たくなるのでした。ところがこの溫室のなかの空氣ときたら、ひそりともしないのです。尤も時たま冬の暴風(あらし)が硝子を吹きやぶつて、霧氷を一ぱいに含んだ身を切るやうな冷氣が、圓天井の下へどつと流れ込むときは別でしたが。その冷氣の流れに打たれたら最後、葉は色つやを失(な)くして、縮くれあがつて萎れてしまふのでした。

けれど割れた硝子はいち早くとり換へられるのでした。この植物園の園長さんは立派な學者で、溫室の本館のなかに別に設けてある硝子張りの研究室にとぢこもつて、顯微鏡を相手に自分の時間のあらかたを過ごすのが常でしたが、さりとて溫室のなかを亂雜にして置くことは一切ゆるさなかつたのです。

植物たちのなかには一本の棕櫚があつて、脊丈も一ばん高く、美しさも一きは立ちまさつてをりました。研究室に坐つてゐる園長は、この樹をラテン語でアッタレーアと名づけてゐました。しかしこれは彼女が生まれ故郷で呼ばれてゐた名ではなくて、植物學者が考へだした名でありました。產地でついてゐた名を植物學者は知りませんでしたので、棕櫚の幹のところに打ちつけてある白い板には、その名は墨で書いてはありませんでした。或るときその棕櫚の木の育つた暑い國から遙々海をわたつて來た旅人が、植物園の參觀に來たことがありました。その旅人は彼女を見かけるとにつこり笑ひました。故郷のことが思ひ出されたからでありました。

「おや！」と旅人は言ひました、「私はこの木を知つてゐる。」——さうして產地にゐたころの彼女の名を呼びました。

「失禮ですが」と、ちやうどそのとき何かの草の莖を、一心にメスの刃で切りこまざいてゐた園長が、例の研究室のなかから呼びかけました、「あなたは思ひ違ひをしておいでです。今あなた

が仰しやつたやうな木なんか、この世の中にありはしません。それはブラジル產で、アッタレーア・プリンケプスといふのです。」

「はあ、なるほど」とブラジル人は答へました、「植物學者がこれをアッタレーアと呼んでゐることは、いかにも仰しやるとほりでせう。しかしまたこの木には、產地でついてゐる本當の名があるのですよ。」

「學問上ついてゐる名が本當の名なのです」と植物學者は無愛想に言ひすてて、研究室の硝子戸をぴしやりと閉めてしまひました。一たん科學者が物を言ひかけたら、默つて拜聽するものだといふことさへ心得てゐない人間に、仕事の邪魔をされたくなかつたからでありました。

けれどブラジル人は何時までもそこに佇んで、その木を眺めてをりました。そしてだんだん悲しい氣持に落ちてゆきました。旅人は故郷のことを思ひだしたのです。あの太陽や青空を、珍らしい鳥や獸の棲んでゐる豐饒な森を、あの沙漠を、あの妙なる南國の夜を、思ひ出したのです。それからまた、自分は世界ぢゆう隈なく遍歷つて見たものの、生まれ故郷にゐたときのほかは、どこにゐても幸福な氣持になれなかつたことも、思ひ出されたのでありました。旅人はさながら棕櫚の木と別かれを惜しむかのやうに、片手でそつと木の膚にさはつて見てから、植物園を出て行きました。そして翌る日はもう、故郷へ向けて出帆したのでありました。

が棕櫚の木は置いてきぼりです。これまでも隨分と切ない思ひをしてゐたのに、今ではなほのこと切なさが募るのでした。彼女は全くの一人ぼつちだつたのです。彼女はほかの草木の頂きを六間ちかくも拔いて聳えてゐましたので、下にゐる植物たちは彼女を憎み羨んで、何て傲慢な女だらうと思つてゐました。人並はづれて身丈の高いといふことは、結局彼女にとつては悲しみの種になるだけでした。それも、皆んなはあして一緒に暮らしてゐるのに、自分だけは一人ぼつちだ——と云ふことだけならまだいいのですが、なほその上に、なまじ脊のたかいお蔭で、植物たちにとつて大空の代りになつてゐるもの、つまりあの忌々しい玻璃屋根に、誰よりも一ばん近いものですから、彼女の胸には誰よりも深く故郷の青空のことが刻まれて、人一倍それが戀しく懷かしかつたのです。その玻璃屋根ごしに、時をりは何かかう青い色が見えるのでした。それは蒼穹でありました。見知らぬ國の、色褪せた空ではありましたが、でもやつぱり青空には違ひありませんでした。で、草木たちがてんでにお喋りをしてゐる時、アッタレーアはいつも默り込んで、空を慕つてをりました。たとひあの色褪せた空の下でもいい、ちよいと表へ出て佇むことができたらどんなにいいだらうと、そればかりを思つてをりました。

「ねえ皆さん、どうでせうね、もうぢき水を掛けて貰へるんでせうかしら?」と、水氣の大好きなサゴ椰子が尋ねました、「あたくしもう、ほんとに今日は乾あがつてしまひさうですのよ。」

「いやあ、あんたの言はれることには、ほとほと驚き入りますなあ、お隣りさん」と、太鼓腹の仙人掌が申しました、「毎日あんなにどつさり水を掛けて貰つてゐる癖に、それでもまだ不足だと言ふんですかね？　まあこの私を御覽なさい。私はほんの僅かの水分しか頂戴しちやゐませんがね、でも御覽のとほり艷々と、みづみづしてをりますよ。」

「あたくしどもはあんまり儉約しい暮らしには慣れとりませんのでねえ」と、サゴ椰子は答へました、「あたくしどもは何處やらの仙人掌さんみたいに、からからに乾いたみすぼらしい地面ぢや、育たないんでございますよ。あたくしどもは、かつがつの暮らしなんぞには慣れてをりませんの。それに、これははつきりお斷りして置きますけれど、誰もあなたの御意見なんぞお願ひしてはをりませんわ。」

と言つて、サゴ椰子はつんと默つてしまひました。

「あたしのことを申しますとね」と、肉桂が口を出しました、「あたしは現在の境涯にまづまづ滿足ですわ。そりや此處は退屈といへば退屈ですけれど、その代り誰にも皮を剝がれずに濟むことだけは、安心してゐられますもの。」

「とは仰しやるがね、私ちどもは何も皆んなが皆んな、皮を引つ剝がれて來たわけでもありませんぜ」と、まるで木のやうな恰好をした大きな蕨が申しました、「そりや勿論、皆さんのうちに

は、こんな牢屋暮らしが極樂みたいに見える方も、澤山おいででせうがね。何しろ自由の身だつたといつても、みじめな暮らしをして來たんですからねえ。」

すると肉桂は、皮を剝がれた昔のことも忘れて、おこつて言ひ合ひを始めました。肉桂の肩をもつ草木もあれば、蕨の味方をする草木もあるといふわけで、わいわいと大變な喧嘩になつてしまひました。もし手足が動かせるのでしたら、きつと擲りあひになつたに相違ありません。

「何だつて喧嘩なんかなさるの、皆さん」とアッタレーアが申しました、「それで御自分たちの暮らしがよくなるとでもお思ひですの？　角づきあひをしたり癇癪を起こしたりで、ただ御自分たちの不幸を增すだけの話ぢやありませんか。喧嘩なんかはやめにして、大事なことをお考へなさるがいいですわ。まあ私のいふことを聽いて頂戴。みなさんは、もつと高くもつと廣く、ぐんぐんお伸びになるがいいわ。枝を伸ばして、あの枠や硝子を押しあげるんです。さうすればこの溫室なんぞは木つ端みじんに消し飛んぢまつて、あたし達は自由の天地へ出られるといふものですわ。一本やそこらの枝で突つぱつて見たところで、ちよきんと剪られてしまふのが落ちでせうけど、百本もの力づよい勇ましい幹が、總がかりで突つぱつたとしたらどうでせう？　もつと氣を協せて働きさへすれば、勝利はあたし達のものですわ。」

はじめのうちは誰ひとり、棕櫚に異議を申し立てるものはありませんでした。みんな默り込ん

で、何と挨拶したものか迷つてゐたのです。やがてサゴ椰子が覺悟のほぞを決めて、

「そんなの馬鹿げきつた話だわ」と、言ひ放ちました。

「馬鹿げた話だ！　馬鹿らしい話だわ！」と草木はてんでにがやがや言ひ出して、アッタレーアの提案なんぞ愚にもつかない寢言だといふことを、われがちに證明しようとかかるのでした。

――「とんでもない空想だ！」と草木は叫ぶのでした、「ばかばかしい！　夢みたいな話だ！　鐵枠は頑丈なんだ。あれを毀さうなんて、とても出來るもんぢやない。それにまた毀せたところで一たい何になる？　人間たちが鋏や斧を持つてやつて來て、枝をちよん切つてしまふだらう。枠の破れ目は塞いでしまつて、また元の李阿彌になつちまふだらう。いや、折角ちやんとついてゐる手足を、むざむざちよん切られるだけ損だよ……。」

「ぢや、好きになさるがいいわ！」とアッタレーアは答へました、「かうなつたらもう、私にも覺悟があります。あなたがたにはまあ構はずそつとして置きませうよ。どうなりと好きに暮らしなさるがいいわ。愚痴をこぼし合つたり、水の呉れ方が多いとか少いとかで喧嘩をしたり、まあ何時までもさうしてこの硝子蓋の下に居殘つてなさるがいいわ。私はたとひ一人でも、自分の道を切り拓きますわ。私はこんな鐵格子や硝子ごしにではなく、ぢかに青空と太陽が見たいんです。――いいえ、見ないで置くもんですか！」

さういふと棕櫚は、まるで翠の小だかい峰のやうに、眼の下にひろがつてゐる溫室仲間の林を傲然と見おろしました。仲間は誰ひとりとして、彼女に言葉を返す勇氣のあるものはなかつた。ただサゴ椰子が隣りの蘇鐵に向かつて、小聲でかう言つただけでした。

「まあ見てゐませうよ。お前さんの自惚れがいい加減でやまるやうに、その憎たらしい大頭のちよん切られるところを、ゆつくり拜見するとしませうよ。本當に高慢ちきな女だわ！」

ほかの草木は默つてゐましたが、心の中ではやはり、アッタレーアの横柄な言葉に腹をたててをりました。ただここに一本の小さな草があつて、その草だけは棕櫚の態度に腹もたてなければ、彼女のお談義に氣を惡くしてもゐませんでした。それは溫室おゆうの草木のなかで一ばん慘めな、誰にも相手にされないやうな小さな草でありました。ひ弱な、色つやのない匐ひ草で、厚ぼつたい萎びた葉をつけてゐました。この草には別にこれといつて目だつた特徴もなく、ただ溫室の床の裸か地を隙すために植ゑてあつたのでした。彼女は自分のからだを大きな棕櫚の根元へ卷きつけて、その言葉に耳を澄ましてをりましたが、なるほどアッタレーアのいふ通りだと思ひました。自分としてはべつに熱帶の大自然を知つてゐる譯ではないのですが、やつぱり大氣と自由は好きだつたのです。溫室は彼女にとつても、やはり牢屋でありました。『私みたいなつまらない萎びた草でさへ、自分の育つたあの灰色の空や、蒼ざめた太陽や、冷めたい雨に逢へないのが、こん

なにも辛いんだもの。この見事な威勢のいい樹にしてみれば、囚はれの境涯がどんなにか切ないことでせう！』さう彼女は考へて、棕櫚の幹にやさしく纏はりついて甘えるのでした。『なぜ私は大木に生まれつかなかつたのだらう？　大木に生まれてさへゐたら、この人の忠告どほりにしたらうに。私たちは手に手をとつてぐんぐん伸びて、一緒に自由の天地へ乗り出せただらうに。さうなつたらほかの連中だつても、なるほどアッタレーアの言ふ通りだつたと、思ひ當たるに違ひないわ。』

けれど彼女は大木ではなくて、ほんの小つぼけな萎びた草でありました。ですから彼女にとつては、アッタレーアの幹にいよいよ優しくまつはりついて、一か八か試みられようとしてゐるその幸福を、自分もどんなに愛してゐるか、どんなに望んでゐるかといふことを、彼女に囁くのが關の山だつたのです。

「今さら申すまでもないことですが、私たちの國はあなたのお國のやうに暖かでもありませんし、空も澄みきつてはゐませんし、また豐かな大雨が降るわけでもありません。けれど私たちの國にだつて、空もあれば、太陽も風もありますわ。私たちの國には、あなたやあなたのお友達のやうに、巨きな葉やみごとな花をたわわにつけた、華麗な草木は見られませんわ。けれど私たちの國にだつて、松だとか樅だとか白樺だとか、とても立派な樹が生えてゐますわ。私は小つぼけな草ですから、とても自由なんぞ望めさうもありませんが、あなたはそんなに形も大きいし、力もおありですもの！　あなたの幹は丈夫ですし、それにあと一伸びすれば玻璃屋根にとどくんですわ。あなたは屋根をぶち拔いて、ひろびろした天地へ出て行けるに違ひありませんわ。さうしたらこの私に、大空の下は今でもやつぱり昔ながらの見事な眺めかどうかを、話して聽かせて下さいね。私はそれだけで滿足しますわ。」

「ねえ小さな蔓草さん、お前さんはなぜ私と一緒に出て行かうと思はないの？　私の幹は丈夫でしつかりしてゐるわ。私の幹に倚りかかつて、ここまで這ひのぼつてお出で。お前さんを背負つて行くぐらゐ、私には何でもないんだから。」

「いいえ、とても私には駄目ですわ！　だつてほら、私はこんなに萎びた弱い草なんですもの、蔓一本だつて持ちあげる力はありませんわ。いいえ、とても御一緒には參れません。あなたは一人で伸びて、幸福になつて下さい。ただ一つお願ひは、あなたが自由の天地へお出なすつたとき、時たまはこの小つぼけな友達のことを思ひ出して下さいね！」

そこで棕櫚は伸びはじめました。今までも溫室を參觀にきた人々は、彼女のすばらしい身の丈に驚きの目をみはつたものですが、その彼女がひと月ましにますます高くなつて行つたのです。園長はこのめざましい伸び方を、世話がよく行き屆いたせゐにして、溫室を經營して任務を遂行

してゆく上での、自分の見識を誇るのでありました。

「まあ一つ、そのアッタレーア・プリンケプスを見て下さい」と、園長は言ふのでした、「これほどよく育つたやつは、ブラジルへ行つたつて滅多には見られませんよ。私どもは、植物たちが温室の中にゐても、野育ちの場合と全く同樣に思ふさま伸びられるやうに、知能を傾けたものですが、私にはどうやら、多少の成功を收めえたやうに思はれますよ。」

さう言ひながら、園長はさも得意さうな面もちで、ステッキをあげてその丈夫な木膚を叩いて見せるのでした。するとその音は、溫室ぢゆうにびんびん響きわたるのでした。棕櫚はこの打擲に堪へかねて、葉をわなわなと顫はせるのでありました。おお、もしも彼女に聲があつたなら、どんなに物すごい忿怒の叫びを、園長は耳にしたことでありませうか。

『あの人は、あたしがかうして伸びるのを、あの人を喜ばせるためだと思つてるんだわ』と、アッタレーアは心に呟くのでした、『勝手にさう思ふがいい！』

そして彼女は、あらん限りの樹液をひたすら伸びるために使つて、根や葉にまはる樹液をまで奪ひながら、ぐんぐん伸びて行きました。時をり彼女には、圓天井までの距離が一向に縮まらないやうな氣がするのでした。すると彼女は力いつぱいに氣ばるのです。さうかうする内に、枠はだんだん近くなつて、たうとう一枚の若葉が、ひやりと冷めたい硝子と鐵枠にさはりました。

「御覽よ、御覽よ」と草木はどよめき立ちました、「たうとうとどいちまつたわ！ 本當にやる氣なのかねえ？」

「まつたく怖かないほど伸びたもんだなあ！」と、樹みたいな恰好の蕨が申しました。

「へん、伸びたが何ですかね！ 何と珍妙な恰好ぢやありませんか！ これこの私みたいに肥れたら、それこそ大したもんですけれどねえ！」と、ビヤ樽みたいな胴をした、肥つちよの蘇鐵が申しました、「それにまた、ひよろ長くなつたところで何になりますかね？ 結局なに一つできはしませんよ。格子は頑丈だし、硝子は厚いんですものね。」

また一と月たちました。アッタレーアはもつと高くなつて、たうとう仕舞ひには、ぴんと鐵枠につつぱつてしまひました。もうそれ以上は伸びる場所がありません。そこで幹は撓ひはじめました。大きな葉のむらがり繁つた天邊のところは、もみくしやになりました。枠どりの冷めたい鐵棒が、柔らかな若葉の肌へくひ入つて、ずたずたに引き裂いたり、みじめな恰好に押しひしやげたりしましたが、棕櫚はたじろぎはしませんでした。葉がどうならうと、その身がどうならうと一切いとはず、ひた押しに格子を押しあげたので、さしも頑丈に鐵で組みあげた格子も、たうとうじりじりと撓ひはじめました。

ちひさな蔓草は、この闘ひの有樣をじつと見守つてゐましたが、心配のあまり今にも氣が遠く

なりさうでした。

「ねえ、あんたそれで痛くはないこと？　鐵枠はそんなに頑丈なんだから、いつそ引き退つた方がよくはなくつて？」と、小草は棕櫚にききました。

「痛いですつて？　自由の天地へ出ようといふ一念の前に、痛いくらゐが何ですか？　私を勵まして呉れたのは、そのお前さんだつたぢやないか？」と、棕櫚の木は答へました。

「ええ、勵ましては上げましたわ。だつてそれほど難かしいこととは、知らなかつたんですもの。お氣の毒で見ちやゐられませんわ。さぞ苦しいでせうにねえ。」

「おだまり、意氣地なしめ！　私に同情してなんか貰ひますまい！　私はもう死ぬか自由になるか、二つに一つです！」

とそのとき、天地を震はすやうな大きな音がしました。太い鐵の棒が一本はじけ飛んだのです。硝子のかけらが、がらがらつと音をたてて天から降つて來ました。かけらの一つは、丁度そのとき溫室のそとへ出た園長の帽子に、こつんと當たりました。

「こりや何ごとだらう？」と園長は、きらきらと空中に散亂した硝子のかけらを見て、どきりとして大聲をあげました。そして溫室をはなれて逸散に庭へ駈けだすと、屋根をふり仰いで見ました。みれば硝子の圓屋根のうへには、ぴんと頭をもたげた棕櫚の木の綠いろの冠が、誇りかに

聳えてゐるではありませんか。

『たつたこれだけの事か』と、その棕櫚は考へてをりました、『たつたこれだけの事のために、私はあんなに長いあひだ、つらい苦しい思ひをしたのかしら？　これんばかりの物を手に入れるのが、私にとつての最高の目的だつたのかしら？』

もう秋も深くなつてをりました。その頃になつてアッタレーアは、やつとあいた穴からぐいと頭をつき出したのです。霙まじりの氷雨が、しとしとと降つてをりました。身を切るやうな北風が、ちぎれちぎれの灰色の雨雲をひくく這はせてをりました。まるでその雲が兩手をひろげて、抱きついて來るやうな氣がしました。樹々はもうすつかり葉を振り落として、何だか見つともない死人のやうな姿をしてをりました。松と樅の木だけは、暗い綠いろの針葉をつけてをりました。さうした樹々が、陰氣な眼ざしで棕櫚を眺めてゐるのでした。『凍え死んぢまふぞ！』と、樹々は彼女に言つてゐるやうでした、『お前は北國の寒さがどんなものだか、知りはしないのだ。お前にはとても辛抱はできまいよ。せつかく溫室にゐたものを、何だつてまた出て來たんだ！』

そこでアッタレーアは初めて、とり返しのつかない事をしてしまつたと悟りました。彼女は凍えさうに寒かつたのです。また屋根の下へ歸つてはどうでせう？　けれど今となつては、もはや歸るすべもないのです。彼女は寒い風の吹きすさぶなかに佇んだまま、どつと押しよせる風の重

さや、ひりひりと膚をかすめる粉雪の痛さをじつと忍びながら、汚ならしい色をした空や、みすぼらしい北國の自然や、植物園のむさくるしい裏庭や、狹霧の彼方に見えがくれする單調な大都會のたたずまひやを、眺めてゐなければならないのです。下界の溫室のなかで、人間たちが自分の後始末を相談してゐるあひだ、さうして待つてゐなければならないのです。

園長は棕櫚の木を鋸で挽いてしまへと言ひつけました。『あの上にもうひとつ別の圓屋根を建て增してもいいが』と、園長は申しました、『だがそれも長いことはあるまい。あの木はまた伸びて行つて、やつぱり毀してしまふだらうよ。それにまた建て增すとなれば、お金もどつさりかかるからなあ。面倒だ、挽いてしまへ。』

棕櫚は太い綱で縛りあげられました。倒れるとき溫室の壁を毀さないための用心でした。そしてすぐ根元のところから、鋸で挽かれてしまひました。その幹に卷きついてゐたあの小さな蔓草は、どうしても友達と離れたがらなかつたので、やつぱり一緒に鋸の齒にかかつてしまひました。やがて棕櫚が溫室から曳き出されたとき、あとに殘つた切株のうへには、鋸の齒に引きちぎられ、ずたずたになつた蔓草の莖や葉が、みだれ伏してをりました。

「この碌でなしも引つこ拔いて、棄ててしまふんだ」と、園長は申しました、「もう黃色つぽくなつてゐるし、それに鋸の齒でひどく傷んでしまつた。ここには何かほかの草を植ゑようよ。」

園丁の一人が手ぎはよく根もとへ鍬を入れて、ひと抱へもある蔓草をぐいと引つこ拔いてしまひました。彼はそれを籠のなかへ抛りこんで、裏庭へはこんで行きました。そして、今では泥濘のなかに横たはつて、もう半ば雪をかぶつてゐた棕櫚の亡骸のうへに、どさりと棄ててしまひました。

あとがき

ガルシンを語る人はかならずその印象ぶかい眼のことをいふ。それは睫毛のながい、ぱつちりした、茶色のよく澄んだ眼で、幼少のころから善良さと溫順さと、そして一種の哀愁の色を湛へてゐたといはれる。それは彼が四歳のとき或る將軍から、「洗禮者ヨハネを思ひ出させる」と讚へられた眼であり、また晩年には畫家レーピンの名作『イヴァン雷帝とその皇子』において、父帝の手に殪れた皇子のまさに息たえんとする痛ましい眼光の、モデルになつた眼でもあつた。彼の藝術を語ることは、やがてこの眼の閲歴を語ることにほかならない。それは前世紀末の暗澹たる一時代に生きたロシヤ・インテリゲンツィアの良心の營みを、そのままに照り返してゐる眼だつたのである。

フセヴォーロド・ミハイロヴィチ・ガルシン Vsevolod Mikhajlovich Garshin は、一八五五年二月、南露エカテリノスラーフ縣なる母方の領地で生まれた。父方の家系は古く黄金汗國時代に發祥すると傳へられる小地主貴族である。胸甲騎兵の將校であつた父親とともに南ロシヤで過ごされた彼の幼年時代は、あたかもあの凄慘なクリミヤ戰役の直後に當たつてをり、從つて父の

家に集まる軍人たちの血腥い戰爭譚に、彼の幼ない情感と獻身愛とははげしく搔きたてられずにはゐなかつた。加ふるに頗る放任主義であつたらしい父親の膝下における早期の濫讀があつた。自傳によると五歳から八歳までのあひだの讀書は、ロシヤの古典はもとより、ビーチャ＝ストウ女史の諸作やユーゴーの『巴里の聖母寺』、また當時獄中にあつたチェルヌィシェーフスキイの急進的なユートピア小說『何を爲すべきか』にまで及んでゐたといふ。

一八六三年彼はペテルブルグに移り、やがて同地の中學校に入學したが、卒業の直前十七歳のとき最初の狂疾の發作に襲はれて、暫く精神病院に收容されなければならなかつた。この精神の疾患は母方の遺傳に根ざすものといはれてゐるが、より直接の素因が彼の幼時からの過敏な感性と外界印象との、激しい摩擦にあることは疑ひをいれない。

やがてやうやく中學を卒へた彼は、醫科大學志望を學制上の支障によつて斷念して、鑛業專門學校に入學した。このころの彼は、しきりに若い畫家の一團と交はつて、彼等に勵まされながら文藝上の試作に耽つた。彼が有名な畫家ヴェレシチャーギンの生々しい戰爭畫から、强烈な印象を受けたのもこの時代のことである。畫家たちとの交遊の形見として、彼には生涯を通じて數篇の美術批評がある。

一八七六年バルカンが大いに亂れた。彼は從軍を願ひ出たが、適齡未滿の故をもつて許されなかつた。しかし翌年の四月いよいよ土耳古に對する宣戰が布告されると、彼は進級試驗を拋つて一兵卒を志願し、直ちにブルガリヤの戰線へ向けての辛勞多い行軍に加はることができた。從軍

の動機はただただ、人々と苦難をともにせずにはをられない殉教的な衝動であつた。戰場で彼は勇敢な兵士だつた。前後二回の戰鬪に參加したが、一八七七年八月アヤスラルの激戰で左脚に負傷して、同月ハリコフの家に後送された。彼はこの療養中に、すでに野戰病院で書き始められてゐた作品を脫稿した。それが『四日間』*Chetyre dnja* で、同年十月、當時人民派（ナロードニチエストヴオ）の雜誌として權威のあつた『祖國時報』に揭げられ、異常なセンセイションを捲きおこした。

『四日間』は同じ隊の一兵卒の身におこつた怖るべき出來事に取材してゐる。彼はそれを戰場で屍體埋葬の勤務についてゐた際に親しく目擊したのである。彼自身の戰地における體驗を直接に物語つた作品としては、『一兵卒イヴァーノフの回想より』（八三年發表）及び『戰爭情景』（七七年發表）がある。總じて彼の「戰爭物」の特色は、普通人の眼には決してうつらぬ壯大な戰爭繪卷を强ひて描かうとはしないことである。彼は純粹に一兵卒の眼をもつて、閃々として去來する「戰爭の赤い翼」のはためきを、素直に記しとどめるのである。

作家としての道の開けたのを見て、彼はその年の末ペテルブルグに歸つて、創作に沒頭した。この二三年間は彼が心身ともに健康にめぐまれて旺盛な創作力を示した時期で、『アッタレーア・プリンケプス』*Attalea princeps*（八〇年發表）はこの頃の所產である。これは後にも述べるやうに動植物の世界に舞臺を借りた一連の童話風の作品の一つであるが、その整つた形式によつてこの方面での彼の成功作とされてゐる。靑空を慕つてやまぬ棕櫚の運命に託されたこの苦澁な比喩物語は、絕望的なアイロニイを湛へながら、暗澹たる時代の空氣につつまれた良心の苦悶を表

はしてゐる。これと同じ時期に書かれた作品には、『極めて短い物語』をはじめ、『臆病者』、『邂逅』、『畫家たち』、『一夜』など、獻欵と哀訴に貫かれた諸篇が數へられるが、なかんづく『從卒と士官』(八〇年、長篇の第一章として發表)は搖るぎない構成を具へて、チェーホフの零圍氣ゆたかな短篇の先驅をなすかに見える佳作である。

しかし一八八〇年の二月、彼は再びはげしい狂疾の發作に襲はれた。このときの常軌を逸した行動の一例として、夜中の三時に突然、時の大官ロリス"メーリコフを訪問したといふ話がある。この人物はまづ穩健な政策によつて政治犯の鎭壓に當たつてゐた獨裁官であるが、彼はその面前に跪いて號泣しながら、メーリコフ襲擊の廉によつて捕へられて、極刑に處せられようとしてゐた一青年の命乞ひをしたのである。そして漸く宥められて辭去したのちも、絶望のあまり終夜、泥濘にまみれてペテルブルグの近郊を憑かれた者のやうにさまよつたのであつた。この挿話は、哀憐の重みに堪へずに狂氣してゆく彼の姿をよく物語るものであらう。彼はふたたび精神病院の門をくぐり、その後一年あまりを叔父の田莊に病を養つた。厭世的な基調のうちに明るい諧謔をまじへた『夢がたり』*To, chevo ne bylo* (八二年發表)は、この療養期の所産である。

『夢がたり』は、『アッタレーア』などと並んで、動植物の世界に假託された童話の形式を持つてゐる。ガルシンがかうした童話形式に寄せた愛好は、つとにウスペンスキイも指摘してゐるやうに、この作者獨特の生活印象への異常な敏感さによつて說明しうるであらう。すなはち彼の病める神經は、生活事象を逐一精細に記述する重荷に堪へられず、それら印象の壓迫からの急速な

解放を、比喩の世界に求めたものであらう。例へば『夢がたり』のごとき、文字どほり掌大の小作品でありながら、そのうちに作者が觸れようと試みてゐる人生の面の夥しさに、われわれは驚くのである。

一八八三年、彼はナヂェージダ・ゾロチーロヴァといふ女醫學生を妻にむかへた。これは心身ともに病みつかれた彼の後半生にとつて、母とも姉とも、また保姆ともなつた女性である。彼はまた官途について、ここに束のまの平安が訪れることになつた。この時期の作品には、『紅い花』*Krasnyj tsvetok* (八三年發表)、『熊』(同じく)などがある。

『紅い花』はハリコフの精神病院における作者自身の痛ましい體驗を布地として、これに『惡』との鬪ひに身を滅ぼす一インテリ青年の悲劇を縫ひとつたものであり、ガルシンの全作を通じて最も調子の高い、彼の正義感の力づよく流露した作品として許されてゐる。またこれを精神病理の側から見ても、當時の精神病醫シッコルスキイ等も指摘したやうに、狂躁狀態の內面描寫——殊に正常な意識と病的な意識との並存狀況の精緻きはまる浮彫りにおいて、古典的價値を有するものとされてゐる。この作品はやがてチェーホフの『六號室』などによつて承けつがれる一系の癲狂院小說の、きららかな源泉をなすものであつた。

なほこのころ彼は、ピョートル大帝の時代に取材する歷史小說をもくろんで、しきりに材料の蒐集に努めたけれど、ほどなく癇疾が惡化したため、この計畫はつひに實現されなかつた。すなはち一八八四年からのち、彼は毎年の春から夏にかけて、救はれがたい憂鬱症——數箇月にわた

つて持續する無興味と無氣力と不眠症――に定期的に見舞はれるに至り、漸く創作時における精神の緊張に堪へず、作品の數は目に見えて減つて行つた。この最後の時期の所産としては、量的には最も大きく、質的にはかなりの弛緩を示してゐる作品『ナヂェージダ・ニコラーエヴナ』のほか、一二の民話の試みがある。

『信號』*Signal*（八七年發表）は明らかに、當時相ついで發表されてゐたトルストイの民話の刺戟によつて書かれたものである。とはいへ彼がトルストイに學んだのは民話の特質をなす素朴で通俗的な表現精神であり、その根柢に横たはる教義に至つては、ガルシンの全く認容しがたいものがあつたのである。『信號』には、あらゆる惡條件の累積にも拘はらず、なほ人間の犠牲の力への燃えるやうな信念を棄てえぬガルシンの心情が、最後の歌をひびかせてゐる。

一八八八年三月、痼疾の漸く重るのを感じた彼は、遂にコーカサスへの轉地療養を決心したが、その出發の朝、迫りくる發狂の恐怖に脅やかされて發作的に階段の上から飛降り自殺を圖つた。そして脚部に致命傷を負つて、五日にわたる苦悶ののちに息を引きとつた。臨終の床を見舞つた友人の「痛むか」といふ問ひに、彼は心臓を指さしながら、「ここの苦しみに比べれば、こんな痛みは何でもない」と答へたと傳へられる。

ガルシンの生涯と藝術が、「異常にとぎすまされた道德的敏感さ」によつて貫かれてゐたことは、以上の瞥見からも容易に導きうる結論である。彼も亦「悔悟せる貴族」の一人として、その精神の系譜は、サルトィコフ＝シチェードリンやウスペンスキイなど所謂七〇年代の人民派作家に、

直接のつながりを持つてゐる。しかも彼がやうやく青年期を迎へたときは既に、人民派の理想の夢は早くも農民の現實の姿のうへに幻滅を味つてゐたのであるし、ついで八〇年代に入ればあの確信的な反動家ポベドノースツェフの强力な彈壓に、あらゆる希望は根こぎにされるのである。それは抒情詩人ナドソンによつて、

花は散りうせ火は燃えつきた
底しれぬ夜が墓穴のやうに暗い……

と歌はれた暗澹たる日々であつた。ガルシンの作家的生涯は、この幻滅と破産の一時代のうちにあわただしく開花しまた閉ぢたのであつて、この意味から彼を、もつとも純粹な八〇年代作家と呼ぶことができるであらう。

その三十三年の短い生涯を通じて完成された作品は二十篇に滿たず、業績は決して大きくはないのであるが、しかも彼が永く愛慕される所以は、その病弱の身をもつてあの窒息せんばかりの空氣のなかに、一點の弱々しくはあるが曇りない良心の灯をよく守り通したところにある。このささやかな灯はやがて、コロレンコの不撓の實踐力や、チェーホフの魔のごとき現實直視の力によつて承け繼がれることになつたのを思へば、晩年の彼がこの二作家に篤い信頼を置いてゐたのも決して偶然ではないのである。

一九三七年夏

譯者

昭和十二年九月十日印刷
昭和十二年九月十五日發行

紅い花 ★

定價二十錢

譯者　神西清（じんざい きよし）

發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　白井赫太郎

精興社印刷

岩波文庫
1565

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波書店
電話 神田一八七〇・一八九〇・一八八〇番
九段一〇二二番（小賣部專用）
振替口座東京二六二四〇番

（永井製本）

讀書子に寄す

――岩波文庫發刊に際して――

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために藝術が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和五年七月

岩波

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black